

海外の東方学研究者による
京都大学人文科学研究所の教育研究活動に関するレビュー

ジャン＝ピエール・ドレージュ（フランス極東学院院長）
金沖及（中共中央文献研究室副主任・中国史学会会長）
張広達（北京大学中国古代史研究中心教授・プリンストン大学客員研究員）
張海鵬（中国社会科学院近代史研究所所長）
黄寬重（台湾中央研究院歴史言語研究所所長）
陳耀庭（上海社会科学院宗教研究所前所長）
アラン・チャン（シンガポール国立大学人文社会学部副学部長）
スタファン・ローゼン（ストックホルム大学東洋言語研究所教授）
虞和平（中国社会科学院近代史研究所副所長）
ヴィクター・H・メア（ペンシルヴァニア大学教授）
葛兆光（清華大学中文系教授）
張豈之（西北大学名誉校長・清華大学教授）
ジョシュア・A・フォーゲル（カリフォルニア大学サンタ
バーバラ校教授・プリンストン大学高等研究所客員教授）
張啓雄（台湾中央研究院近代史研究所研究員）
黄自進（台湾中央研究院近代史研究所研究員）
ドン・C・プライス（カリフォルニア大学デーヴィス校教授）
宋鎮豪（中国社会科学院歴史研究所研究員）
トーマス・A・メッツガー（スタンフォード大学フーヴァー研究所教授）
章開沅（華中師範大学中国近代史研究所教授）
黄留珠（西北大学歴史系教授）
オリヴァー・ムーア（ライデン大学中国学研究所講師）
湯志鈞（上海社会科学院歴史研究所研究員）
楊天石（中国社会科学院近代史研究所研究員）
アンデルス・カールソン（ロンドン大学アジア・アフリカ学部講師）
牟発松（武漢大学人文学院歴史系教授）

京都大学人文科学研究所

2002年（平成14年）3月

海外の東方学研究者による京都大学人文科学研究所の教育研究活動に関するレビュー

京都大学人文科学研究所が主催する連続公開シンポジウム「21世紀の東方学」は、新しい世紀の東方学がいかなるものであるべきか、人文科学研究所ひいては京都大学がいかなる研究方向と研究体制をもってその新しい東方学を構築していくことができるのか、を探る試みである。

第1回シンポジウムの趣旨説明において桑山正進人文科学研究所所長（当時）はこの観点から、海外の大学・研究機関に所属する第一線の研究者による、日本の、京都の、そして人文科学研究所の東方学に対する評価や展望に関するレビューの計画を開示した。それは言うまでもなく、我々が自らの研究教育活動のあり方を再検討し、新しい東方学を構築していくための立脚点と指針を得ることを目的とするものであった。また同時に人文科学研究所が従来同様、東方学における国際的研究教育拠点であり続けるためにも、特に海外からみた評価と展望にはどのようなものがあるのか、この機会にしっかりと把握したいと願うものでもあった。

このことを承け、第1回シンポジウムの終了後、我々は以下のような内容でレビューを依頼した。

レビュー依頼項目

1. 京都大学および人文科学研究所における従来の東方学をめぐり研究活動に対する評価
 - (1) 研究内容（資料・分析手法・重要性・信頼性・特色など）
 - (2) 国際協力体制（外国人研究者の受け入れ体制・人文科学研究所の所員による海外での研究活動など）
 - (3) 研究成果の公表（発表言語・サーキュレーションなど）
 - (4) 文献情報サービス体制
 - (5) その他
 2. 京都大学および人文科学研究所における今後の東方学をめぐり研究教育活動に期待する点
 - (1) 研究内容（新たな研究領域の創成など）
 - (2) 国際協力体制
 - (3) 研究成果の公表
 - (4) 情報公開の方法
 - (5) 教育体制
 - (6) その他
- これらの全てあるいは一部について、回答形式、分量と

も自由に評価を行っていただきたい旨を書面に認め、同時にシンポジウムの趣意書（要約）と第1回・第2回のプログラムを同封し、我々が現在どのような方向を目指し、何を行おうとしているのかを理解していただけるよう努めた。

その結果、2002年1月末までに後掲のように23通の回答を得ることができた。内訳は中国から13名、台湾から1名、アメリカから4名、フランス・スウェーデン・オランダ・イギリス・シンガポールからそれぞれ1名である。いずれも我々が予期していた以上に真剣で熱のこもったレビューであった。なかには10頁近くにのぼる長文のものもあり、まさしく人文科学研究所がこれまで積み重ねてきた研究業績、あるいは国際協力の実績への高い評価と信頼のあらわれであるといえよう。それぞれに所属機関において要職をつとめられ、日常的に多忙をきわめる方々であるうえに、年末年始の慌ただしい中、しかも返答までの期間がきわめて短かったにも関わらず、熱意と学術への愛情に溢れる回答を寄せてくださった回答者の方々には、この場をかりて心よりの感謝を申し述べたい。

寄せていただいたレビューについて、その全訳（ただし手紙文の頭語・結語に類する表現は原則として省略）を掲載したので、詳細についてはそちらを参照していただくとして、全体の傾向についての我々の理解を以下に簡単に記しておく。

従来および将来の研究内容、研究体制について

人文科学研究所が培ってきた世界最高峰の中国古典文献学の伝統や、共同研究方式の意義の大きさについては、ほぼ全員の回答者が強調している。当然、新しい世紀の新しい課題にあたっては、人文科学研究所の東方学が必ずやこの伝統の上に構築されていくべきである、と述べられている〔例えばドレージュ・虞和平・張啓雄・章開沅・湯志鈞・楊天石などの回答を参照。以下同〕。

また別の角度から、現実社会との関係の重要性を強調しすぎるくらいのある現今の世界的傾向の中では、人文科学研究所がこれまで高い水準で遂行してきたような、伝統的価値観の意義をさぐる人文学研究の持つ意味は、日本のみならず世界的により一層重視されねばならず、人文科学研究所がこれまで以上にこの面に留意した研究活動・研究体制を構築していくべきだとの期待も述べられている〔張広達・陳耀庭・ローゼン・カールソン・牟発松など〕。これ

は人文学研究というより広い領域において、人文科学研究所の研究活動が世界的に重要な意味を持ってきたし、これからの持ちうるという評価と期待のあらわれである。そのような観点から、今後は、これらの基礎基盤の上に立ち、現代研究や実地調査などにも重点をおきつつ、より学際的領域横断的な研究分野の創設に意を用いることが奨励されている〔黄寬重・プライス・フォーゲルなど〕。

さらに、日々進歩し続ける電子技術の成果に対応して、漢字情報学研究をこれまで以上に推進することが必要だと指摘がある。特に漢字の整合の問題は漢字文化圏のみならず、国際的文化交流という面からも極めて重要であり、国際的漢字データベースの構築を含め、人文科学研究所が今後この分野において中心的役割を果たすことが期待されている〔張海鵬・章開沅など〕。

国際協力体制の構築

人文科学研究所が国際学会、シンポジウムの主催者としてこれまで以上に活発に活動することが期待されている〔張海鵬・黄寬重・メア・メツガーなど〕。特に将来の課題として、研究者の相互交流の活発化・共同フィールド調査の実施などはもちろんのこと、既存の研究者のみならず、将来の東方学、人文学研究を担う学生・若手研究者の相互受け入れや現地研修プログラムの創設がのぞまれている〔金沖及・黄寬重・張豈之・宋鎮豪など〕。

研究成果、情報公開

従来の研究成果公開や文献情報サービスには一定の評価がある一方で、今後の課題としてネットワーク、ワールド・ワイド・ウェブを用いた成果公表、文献検索システムの構築が強く望まれている。サーキュレーションに関しても、出版物自体のそれよりも、出版情報のサーキュレーションに問題があるという点が指摘された〔チャン・ムーア・カールソンなど〕。また中国語および英語による情報公開・成果発表への希望も提示された〔チャン・ローゼン・葛兆光・黄留珠など〕。

教育体制

人文科学研究所は、昨今、日本の大学では珍しくなってきた助手制度を維持し、若手研究者に研究に専心できる環境を提供してきた。寄せられた回答の中には、人文科学研究所の今日を築き上げてきた大家への言及と並んで、このような若手研究者が次々と育ち、学術伝統の継承と発展が

実現されていることへの高い評価がある。研究所の研究活動に即して言えば、これは過去および現在の研究班と助手制度とに、高い教育的機能を是認するものであると言える〔金沖及・フォーゲル・黄留珠・牟発松など〕。一方、今後の大学院研究科開設計画に関してもほぼ全員から賛意と期待が寄せられた。国際協力体制の項で触れたとおり、これまでの伝統を活かしながら、新たな東方学のフロンティアを切り拓いていくべき学生、若手研究者の組織的な教育および研究支援活動を行っていくことが、国際的にも強く望まれている。

以上のような回答を受け取った我々の側は、予想以上の期待と評価の高さに身の引き締まる思いである。多忙をぬってレビューを寄せてくださった方々のご厚意に報いるためにも、これらの内容を活かした新たな研究教育システムの構築に、より一層真摯に取り組まねばならぬと考えている。

なお、レビュー依頼から回答のとりまとめにかかわる全体作業は人文科学研究所の池田巧・稲葉穰・船山徹の三名が執り行った。ただし、寄せられた回答の内容が予想以上に濃く、また分量も多かったため、翻訳作業については人文科学研究所東方学研究部の助手諸氏に協力を願った。それぞれ多忙な中、依頼を快諾していただいたことに感謝し、ここに銘記してあらためての謝意を表したい。訳語の調整等、最終編集作業は前記三名が行っており、当然のことながら編集・翻訳に関する責任はこの三名に帰するものである。この点も銘記しておく。

レビュー回答者一覧（掲載順，敬称略）

ジャン＝ピエール・ドレージュ（フランス極東学院院長）
金沖及（中共中央文献研究室副主任・中国史学会会長）
張広達（北京大学中国古代史研究中心教授・プリンストン大学客員研究員）
張海鵬（中国社会科学院近代史研究所所長）
黃寬重（台湾中央研究院歴史言語研究所所長）
陳耀庭（上海社会科学院宗教研究所前所長）
アラン・チャン（シンガポール国立大学人文社会学部副学部長）
スタファン・ローゼン（ストックホルム大学東洋言語研究所教授）
虞和平（中国社会科学院近代史研究所副所長）
ヴィクター・H・メア（ペンシルヴァニア大学教授）
葛兆光（清華大学中文系教授）
張崑之（西北大学名誉校長・清華大学教授）
ジョシュア・A・フォーゲル（カリフォルニア大学サンタバーバラ校教授・プリンストン大学高等研究所客員教授）
張啓雄（台湾中央研究院近代史研究所研究員）
黃自進（台湾中央研究院近代史研究所研究員）
ドン・C・ブライス（カリフォルニア大学デーヴィス校教授）
宋鎮豪（中国社会科学院歴史研究所研究員）
トーマス・A・メッツガー（スタンフォード大学フォーヴァー研究所教授）
章開沅（華中師範大学中国近代史研究所教授）
黃留珠（西北大学歴史系教授）
オリヴァー・ムーア（ライデン大学中国学研究所講師）
湯志鈞（上海社会科学院歴史研究所研究員）
楊天石（中国社会科学院近代史研究所研究員）
アンデルス・カールソン（ロンドン大学アジア・アフリカ学部講師）
牟發松（武漢大学人文学院歴史系教授）

ジャン＝ピエール・ドレージュ

（フランス極東学院院長）

京都大学人文科学研究所の研究活動に対する評価

人文科学研究所（1929年に設立）は、ヨーロッパの他の研究所とりわけフランスの研究機関には類を見ない、独自の組織をそなえた研究機関です。

人文科学研究所は、人文学研究部と東方学研究部という、その重要度を等しく有する2研究部より成ります。この区分は東洋学に卓越した地位をあたえるものであり、東方学研究部はほぼその全体が中国学を扱うのにたいして、人文学研究部は現代世界における社会科学や古代インド、古代中近東の研究を扱っています。

人文（人文科学研究所）に過去に奉職した真に偉大な学者たちが成し遂げた空前絶後の業績は、いまさら事細かに説明する必要はありません。これについては、ミシェル・ソワミエ、川勝義雄両氏による論文「人文 京都大学人文科学研究所」（『フランス極東学院紀要』51冊，1963年，615-624頁）に言及するだけで十分でしょう。この論文は、人文でおこなわれた研究が、日本における極東研究にどれほど重要な貢献をなしたかを証明しています。日本語による『東方学報』や西洋言語による *Zinbun* といった人文科学研究所の定期刊行物は、他をもって代え難いものであり、研究所の業績の重要性を証して余りあります。これらの定期刊行物において出版された諸論文は、その研究主題の如何にかかわらず、いずれも常に関心をひく高い品質を保っています。

『東洋学文献類目』は、それを頻繁に使用する必要のある立場にいる研究者たちにとって、他に比類なき工具書であります。

さらに人文科学研究所の図書は、日本でもっとも充実した、もっとも良いもののひとつです。

人文科学研究所は海外の研究者たちを受け入れるのみならず、所員たち自身が国際的研究プログラムに参加することによって国際的協力を携わっています。

研究班は研究所の教授によって組織され、人文学研究部では8つの班が、東方学研究部では12の班があります。それらは、たとえば高田時雄教授の編集による報告書『明清時代の音韻学』のような報告書の出版をもって終了します。こうした報告書は、本研究所の研究が水準の高いことのひとつのしるしであります。

こうした夥しい数の、そして極めて中身の充実した学術活動は、過去および現在と同様の熱意をもって継続されるであろうと期待されます。また、研究プログラムがよりいっそう国際的な文脈において、日本の国外の研究者ならびに研究機関と共に発展するよう希望します。連続シンポジウム「21世紀の東方学」にむけてのプログラムは、そうした方向への一歩であるように思われ、それはさらに促進されねばなりません。

2002年1月19日、パリ
フランス極東学院院長 ジャン＝ピエール・ドレージュ

金沖及（中共中央文献研究室副主任・中国史学会会長）

多少とも海外での中国学研究の状況を理解している研究者であれば、海外でもっとも早く成立した中国学の研究の中心がフランスのパリと日本の京都であり、そして後者はおもに京都大学をその代表とする「京都学派」であることを、おそらくほとんど皆が知っております。パリと京都という研究の両中心は、ただ歴史が古いだけでなく、その豊富で優れた研究成果が世の注目するところとなっております。

私は手元に『京大百年』と『京都大学人文科学研究所要覧』をかねて備えておりますが、この両書によって以下の事がわかってまいります。京都大学の前身 京都帝国大学は1897年に創立されており、それは中国の北京大学の前身 京師大学堂の創立にくらべて一年早いこととなります。京都大学の人文科学研究所は1929年に設置されており、それは人文科学分野の総合研究機構であり、中国学研究は間違いなく最初から重点を置かれた研究分野でありました。

このように長く高い評価をうけてきた著名な研究機構を私がはじめて訪問する機会を得て、貴研究所が開催される学術討論会に参加したのは、1981年に胡繩教授に従って日本を訪問した時のことであります。そのとき貝塚茂樹・桑原武夫・島田虔次・井上清らのたくさんの先輩学者たちはまだ存命中でありましたし、竹内實教授とはそのおり初めておめにかかりました。狭間直樹・小野和子・森時彦教授らにはそれ以前に既に面識を得ておりました。それ以後私は貴研究所を三、四度にわたって訪問いたしましたが、とりわけ1998年1月から7月までのまるまる半年の

あいだ貴研究所の客員教授をつとめ、それによって強く忘れがたい印象を受けたのであります。その主要なものは以下のとおりであります。

第一は、厳密な学風でありました。歴史科学は実証的科學の一つであり、いかなる結論も依拠するにたる十分な量の一次資料から導き出されるのでなくてはならず、加えて何事もおろそかにしない厳肅な態度で研究することが不可欠です。空論はまったく役に立たないのです。貴所出版の『東方学報』はすでに70有余年の歴史をもち、そこに発表された研究成果はみな非常に高い学術水準にあり、それゆえに世界中の中国学研究者の間で大変高い評価を得ております。また貴所の研究者はみな博い見識をそなえているうえに、かつ研究態度はもともと極めて着実に真摯なものであって、これが特色にとんだ京都学派の学術伝統を形作ったのであります。小さな例をひとつ挙げてみたいとおもいます。私が貴所において仕事をしておりました期間、島田虔次教授はすでに80歳をこえて学士院会員という非常に高い名誉を享けておられました。そのとき先生はちょうど『梁啓超年譜長編』の翻訳を主宰しておられました。ある時いくつかの語句をどのように翻訳するのがより適切であるかについて、先生はわざわざ来所のうえ私に下問され、あわせて翻訳を進める中で、このような問題についてすでに60回以上の討論会をもたれた旨をお話してくださいました。島田先生のおおせに私は大変恐縮するとともに、仕事に対してとことん責任を負おうとする先生のお気持ちに、大きな教えを受けたのでございます。

第二は、活気ある学術的雰囲気でありました。定期的に開かれる特定テーマの研究会は、貴所の学術活動の顕著な特色であるとともに、私にとって最も印象的な事柄でありました。私は貴所で仕事をした半年の間に二つの研究会に参加いたしました。どちらも隔週で開催されました。参加するメンバーには京都大学のみならず、神戸・大阪・名古屋・広島から遠く鹿児島までの、中国の問題を研究する研究者が含まれておりました。討論にさきだって周到に準備がなされますし、討論にあたって、参加者の発言はかなり熱意に満ちたものであります。なにがしかの特定テーマの研究会に区切りがつきますと、たいいてい論文を集めて出版されます。このように幾十年を一日の如く地道な活動を続けられて、着実に成果が積み上げられております。それは所内の研究者の研究活動を知らず知らずのうちに促進する作用や、衆知を結集して有益な意見を広く吸収するという作用のほかに、皆の視野を広げることを助けたり、思

索活動をつねに活発に維持したり、異なる機関に所属する研究者同士のつながりと親睦ぐあいをより深いものにすることができるのです。ただこの点からだけでも、貴所が関西地区の中国研究の中心であることは、疑いありません。

第三は、豊富な図書資料でありました。図書資料は歴史研究の基本対象であるということが出来ます。私が貴所で仕事をしていたころ、所内の蔵書は既に50万冊、その中の中国文の図書は30万冊になんなんとし、雑誌も4500種類、その中の中国文雑誌は1500点になろうかという数でした。しかし私にとって最も印象深かったのは書籍雑誌の数ではなく、以下の二つの点でありました。一つは、図書を選択する際の見識が、精密でかつ漏れが無いことであります。私の研究領域にかかわって重要な学術・資料価値をもつ図書はほぼ全部備えられており、市場に溢れていても学術価値の無い図書はほとんど納められていないということです。二つ目は、研究上の需要にもとづいて、あらゆるところから関係図書が発掘・収集されていることです。しばらく前、貴所は梁啓超をテーマとする研究会を設置されておりました。ご存知のように梁啓超の主要な活動は、日本での紹介を經由して西洋近代思想を理解し、それを中国に広めたところにあります。私が貴所の歴史研究室の書架で見出したのは、並べられているまるとがみな梁啓超が当時目を通した日本語の書籍と雑誌であったことです。多くの明治時代の図書と雑誌は日本にあってもはや手にいれる事が容易ではありませんが、貴所は非常な能力を発揮して、国会図書館などからこれらの書物を見出し、それを複写装丁製本してまとめて一カ所にならばれていたのであります。私は大変おどろきました。そこに座れば、そのまま100年前の梁啓超の書齋に身を置いているのとかわりは無いです。私はこのような研究環境に憧れを抱くとともに、このような研究態度にいたく感服したのです。

第四は、人材の輩出です。私は貴所との行き来がすでに20余年になりますが、前世代の老学者があいついで退官されるのを見届けるとともに、いっぼうで若い研究者が続々とたいへんな速さで成長し、代替わりしていくのを目にしてきました。これは大変よこばしい現象です。わたしは貴所で仕事をしていた期間、ずっとこの問題に関心を持ってきましたが、試みに私なりの解答を記してみたいと思います。私が最初に理解したのは以下の2点です。一つは、人材の採用に関してひろく公募し、厳格な試験を課して、優秀なものを採用するという方法であります。このやり方は、貴所に入所して仕事をする若い人々が専門的な基礎を

習得しており、確実に学識を獲得できる優秀な人材であることを裏付けることとなっております。二つ目は、その優秀な若い研究者が貴所に入所後、うまく育てゆくよう環境を整えることに尽力し、図書資料の使用に全面的な利便を与え、専門テーマの研究会に参加させ、海外での資料収集活動や国際学術活動に参加して研究成果を発表するのには経済的な援助しているということであります。この二つの措置はいずれも本質的なものであり、同時に非常に大きな成果をあげていると私には思われるのです。

国際的な学術活動を強化してゆくということは、長く貴所の重視してきたところであります。私自身が貴所で半年のあいだ仕事をしたという経験から申しますと、それは大変よい思い出を私に残してくれました。

もちろん以上述べましたのはただ私の個人的な感想に過ぎず、貴所の長所をはっきりとさせるのに十分ではなく、正確ではない部分もあるでありましょう。しかしこれらはすべて私がこの目で見、身をもって感じたことありますので、あえて記した次第であります。

もし更に一步進めて私の希望を述べるとすれば、以下のようになりましょうか。

第一に、貴所の中国研究は前近代に偏っており、現代中国の研究がやや手薄であります。新たに21世紀になって、日中両国は一衣帯水の隣国として、経済文化交流の関係が、時とともに必ずや緊密になるでありましょう。それゆえ現代中国研究を強化し、多方面の専門家を養成することが更に求められると思われまます。もちろん貴所が現在有している学術的な長所を発揮すれば、かなりの能力で、歴史発展の源流を研究するという角度から、中国の経済・政治・文化の歴史的伝統が現代中国に及ぼす大きな影響を研究することが可能となるでしょう。

第二に、貴所の研究方法は、これまでは文献研究を偏重したものでしたが、今後は実地調査研究を強化する必要があるように思われます。とりわけ現代中国は変化の著しい社会の転換期にあたっており、新たな情況と新たな問題が つぎつぎに発生しています。もし既存の文献だけに依存していくならば、多くの問題を正確にかつ深く理解することは容易でないでしょう。したがって実地調査研究強化の必要性がますます大きくなっているのです。

この二つの意見は当を得ていないかもしれませんが、貴所の参考になればと思ひ、提案した次第であります。

2002年1月18日 金沖及

張広達（北京大学中国古代史研究中心教授・プリンストン大学客員研究員）

貴所の歴史は長く、優れた業績を挙げておられます。貴所の卓越した研究レベルは誰もが認めるところであり、個人および共同研究の成果は学界に広く重んじられ賞賛されています。お手紙により意見を求められましたので、ここに謹んで鄙見を述べる次第です。

1. 貴所は長きにわたって完璧な研究体制をしいてこられました。特に高名な先生によって主宰・指導される研究班や会読班という研究方法は羨ましい限りです。数代の師弟が持続的に共に会読を行い、一つの書物を研究討論するという方法は、個人の専門を活かせるばかりでなく、切磋琢磨、相互啓発、集思広益（多くの意見を集めることによってより大きい成果を得ること）という共同作業の効果も得られます。このような研究方式は研究者を養成し、学術の進展を促進します。私の場合、桑山正進教授の主宰された研究班の成果報告書である、『慧超往五天竺国伝研究』から得たものは計り知れませんが、とりわけ、今日のように人々が情報の波に翻弄され、世間に粗製濫造品が氾濫している状況では、貴所の優れた伝統は貴重で、謹厳で精確な学風は発揚するに値します。

2. ここ100年余り、中国は西洋に学ぶ過程で、しばしば貴国の学術界を仲介として西洋を理解してきました。文・史・哲の多くの人文系科学で、中国は日本の学術界を通じ、日本訳による西洋概念の術語を借用しています。例えば王国維（1877-1927）が真に W・ベンヤミン（1892-1940）の啓示を受けることができたのも、梁啓超（1873-1929）が H・リッケルト（1863-1929）をある程度理解できたのも、日本の学術界を通じた上でのことです。このように西洋の概念を参考にすることは、むしろ東洋の事物に対する概念化思考に役立ちますが、西洋の概念は所詮は西洋文化の発展の脈絡の中で発展してきたものに過ぎず、東洋とは異なるところもあり、無条件に東洋に適用することはできません。例えば、「唯心」と「唯物」という二つの概念について、今は亡き中国の史学家張蔭麟（1905-1942）は「心宗」と「物宗」に改める方が中国の伝統の実際合うと主張しました。今後1世紀の間に、中国と日本の研究者は共同で、東洋の伝統とその再現（representation）において、東西概念の異同をさらに整理し、東西文化の個性

を明らかにすることに努めることができるでしょう。

3. 私の見るところ、貴所の外国人研究者招請による共同研究・学術交流は素晴らしい成果を挙げていると思われま。バステイド夫人（Marianne Bastid-Bruguière）の報告『「近代中国」の時間解釈と日本の影響』および完成課題『梁啓超と宗教問題』は、仏・中・日の学術の特色を総合的に反映していますし、貴所が金冲及教授を招請して報告された中国共産党早期の三次左傾路線からは、貴所が様々な観点を参照し各方面に目を配るという視野の広い学問態度を重視していることが見て取れます。最近貴所は、ジョシュア・A・フォーゲル教授を招請して研究班を立ち上げ、中・日・韓相互理解の問題の研究を主宰されましたが、これはより現実的な意義があります。私は1989年以来10年ほどフランスに滞在しておりますが、仏独の第二次世界大戦後の協力を見るにつけ日中が仏独の和解の経験をどう考えるべきかという問題に思い至ります。これは中国・日本の研究者、学界が研究するに値する課題です。

4. 100年余り、中国は旧学から新学へ、旧式の書院から新式の学校へという人材育成の転変を経験してきました。今日、中国では留学生が大挙してアメリカ、日本、ヨーロッパに押し寄せ、中国の読書人も前近代の士大夫・清流名士から今日の知識人へと根本的に変化しました。最近の中国人留学生は実際、日に日に「アジア離れ」、「中国離れ」しており、このタイプの知識人の育成は中国の将来の発展にかなり影響を及ぼすでしょう。私はこれも中国・日本の研究者が留意すべき研究課題だと考えます。

2002年2月5日 張広達

張海鵬（中国社会科学院近代史研究所所長）

お手紙は早くに頂戴しておりましたが、雑用に追われて、すぐにお返事できず、まことに失礼いたしました。

貴研究所東方学研究部は一貫して私の敬慕するところでもあります。優れた人材を輩出して、赫赫たる成果を挙げておられ、その東方学研究にたいする貢献は並ぶものがありません。あと20歳若ければ、貴所に身を置き深い研究を志

すところですが、いかんせん廉顔は老いて歳月は戻らず、もはや分不相応の願いをもつこともかかないません。

貴所が最近挙行された連続シンポジウムは21世紀の東方学研究を討議されたものですが、日程表によれば、現代中国学研究、フィールドワークおよび漢字情報学研究を非常に重視しておられるようで、まことに結構なお考えです。貴所は長年古典東方学研究を重視してこられました。私の知るところでは、近代中国研究だけでも、狭間直樹先生・森時彦先生がいくつかの研究班を主宰して、研究者を集め、深く近代中国の諸問題を研究討議し、素晴らしい成果をどんどん挙げてずっと学界の注目的でした。今この研究の基礎の上に現代中国研究にも移行されるのは必要な選択であり、欧米の中国学研究と中国本土の研究も、いずれもこの種の移行の最中です。この移行は中国学研究事業発展のために必要なものであり、また国際学術協力・学術連携を強化するために必要なものでもあります。現代中国学研究を強化し、文献研究とフィールド調査を結合して、実際の中国社会を研究する中で文献の価値を観察し、文献研究によって体得した知識を用いて実際の中国社会を検証することは、とても意義のあることで、このような反復比較は学術研究に新たな研究方法や新たな学派を創造することができるはずで

す。電子技術の発展に伴い、漢字情報と電子技術が結びつき、漢字情報は今急速に発展しており、発展の趨勢には目覚しいものがあります。中国国内ではデータベース構築に拍車がかかり、学界の創設にも努力が払われており、漢字圏の国家や地域もみな漢字情報と電子技術を結びつけることに力を入れています。私は近い将来、漢字データベースがネットワーク上で重要な位置を占めるようになると思います。ですから漢字情報学研究を強化することは、東方学研究の重要な構成要素の一つとみなすべきです。

これらの方面において、貴所が大学院教育を創め、系統的に人材を育成されるのであれば、京都学派に新たな発展の趨勢が形成され、新たな内容が加わることになるでしょう。これは私が貴所に期待するところでもあります。

上記に加えて、私は貴所の国際学術交流の面についていささか提案したいことがございます。貴所は国際学術会議開催に関してある種の貢献をされるべきだと思うのですが、研究班で問題を討論するときは試みに中国語を使ってみてはいかがでしょうか。特に近代中国と現代中国研究では、多く中国語を使って交流してみることができるよう思われます。去年12月に神戸で開かれた辛亥革命90周年記念国際

学術会議で、アメリカの研究者が中国語で発言したのは、大変興味深いことでした。中国語運用を強化することは、貴所の国際学術交流の発展に裨益するところ大でしょう。

返信が遅れて、申し訳ございません。大した説ではありませんので、貴所の学術討論会論文集に載せていただくにはおよびません。

張海鵬

黄寛重（中央研究院歴史言語研究所所長）

京都大学人文科学研究所は創立以来、豊富な文献資料を蒐集し、傑出した人材を招聘してきました。謹厳な学風のもとで研究を行い、長期に渡る研究成果を積み重ね、卓越した声望を確立したことにより、国際的中国学研究の重鎮となっております。とりわけ共同研究と個別研究を結合する方法は、細緻な分析・討論によってある特定のテーマの検討に尽力し、堅実な学風をうち立てたことにより、一大特色となっております。しかし、社会環境の変遷により、人文科学研究所も伝統の枠組みを超えて、学際的、国際的な結合を進める必要があり、それによってはじめてさらに積極的な成果を収めることができるでしょう。このような観察と認識に基づいて、私は人文科学研究所のこれまでの成果に対して、大いに評価・感服の意を表すとともに、未来の斬新な発展を期待いたします。謹んで浅見を提示し、ご参考くださるようお願い申し上げます。

1. 総合性をもち学際的な共同研究グループを計画し、総合的な計画を推進します。単一の学問領域における研究の発展は新世紀にあつて巨大な衝撃に直面しており、ある程度の調整が必要な状況です。これに対応する方法は、人文科学と社会科学の結合を強化することにあります。資料・方法ないし理論を相互に学習・交流して総合させます。新しい研究テーマを開発することによって新しい方法と見方を提示します。異なる学問と学問的訓練を背景にもつ人材を招くことを通して、短期・中期的な共同研究方法による、グループ研究を進めます。

2. 国際学術交流を強化して、国際的な協力を促進します。

国際化とグローバル化は新世紀の風潮です。これまでの、単一の機関あるいは国内の同様の学問的訓練を背景にした同一学問の交流方法では、新しい環境の中で、優位に展開することはできません。デジタル化の時代は、また国際的な学術機構の間でも、さらに密接な交流と協力を進めることを必要にさせ、それによってはじめて共同で新しい繁栄を築くことができるようになってきています。文献資料の蒐集・整理・研鑽のみならず、研究テーマの計画、会議の開催ないしは学術情報の交換、学術資源の分業と享受は、いずれも国際協力方式で行うことによってのみ、良い意味での競争の仕組みをつくり、有利な発展条件を作ることができます。多角的な国際協力は、学術資源が過度に集中する現象を回避し、資料の交換と人員の交流・学術刊行物の公開、原稿のオープンな募集と審査制度の設立を包括し、あわせて多言語によって学術情報を公開し、研究成果を発表すべきです。方法的には理論と資料の検討の両方に注意を払うべきです。このような信念に基づき、私は人文科学研究所が国際協力において有益なメカニズムを作り、国際協力上一定の割合の経費を提供することを期待します。国際的に重要な機関と共同協定を取り決め、同僚の出国と共同研究の推進を奨励し、交流において有益な外国人研究者の接待プランを設けることを期待します。

2001年12月31日

中央研究院歴史語言研究所 黃寬重

陳耀庭（上海社会科学院宗教研究所前所長）

回顧と希望

京都大学人文科学研究所の諮問書簡に対する回答

回顧

京都大学人文科学研究所への評価と希望について広く意見をお求めの書簡を拝受いたしまして、まことにうれしく思います。と申しますのも、私は1993年から1994年の間、この世界的に有名な研究機関において、麥谷邦夫教授と9ヶ月の長きに亘って共同研究をおこなったことがあるからです。また、1999年、私が東京大学東洋文化研究所に招聘されており折にも京大人文研を訪問し、そのうえ

麥谷教授を煩わせましてご随行いただき、ついでにとばかりに京都の祇園祭の夜景を見物したこともありました。京都および京都大学人文科学研究所は、私の研究人生の中に拭い去ることのできない印象をのこしております。こんにち、私は既に退官しておりますけれども、こちらの各事業の急速な発展のおかげで、あいかわらず学術活動の中で必死に奮闘中、抜け出すすべもありません。またこれが故に、現在に至っても私は依然として日本の学術活動とその進展はもとより、京都大学人文科学研究所の各教授の活動にも関心を持ちつづけています。

京都大学人文科学研究所は、悠久の歴史をもつ研究機関です。つとに50年代、北京大学中文系にて学問に励んでおりましたころには、もう京大人文研が世界的に有名な中国学の研究所であることを存じておりました。中国が改革・開放を実行して以後、ちょうど私が中国道教研究に従事しはじめたころから、京都大学人文科学研究所の研究成果を十分に重視していただき、当時の福永光司所長の数多の著作、たとえば『中国中世の宗教と文化』の中の「道教における天神の降臨授戒 その思想と信仰の源流」のような著述を勉強かつ検討したものでした。私は自身の文章に、幾度となく福永光司所長が道教についてなされた結論的な評語「道教の神学もまた、中国民族の超越的、絶対的な存在に対する宗教的な帰依の感情、信仰と希求、思惟と思弁との歴史的な博大の蓄積であり、伝統的な総合の成果である」を引用してまいりました。この評語がかつて中国道教の回復と振興の過程において重要な作用を発揮したことは、まったくの誇張なしに言明することができます。福永光司教授の道教と天皇制の関係についての研究も、私たちに京都大学人文科学研究所の学術上の勇気と雰囲気に対して十分な敬服と羨望を抱かしました。

私は、また藪内清教授が主催された中国科学技術研究から価値ある研究成果を吸収することにも注意を払っておりました。『中国の科学と科学者』は、かなり事実重視の客観的な態度で道教と科学の関係を研究したもので、やはり中国道教の回復と振興の中で、冷静かつ事実に基づいて真理を検証する態度を保持するのに助けとなりました。

麥谷邦夫教授は20年近いつきあいのある古い友人です。陶弘景についての彼の早期の研究論文は、中国の茅山道教の復活に直接的な助けとなりました。彼がコンピュータを研究の道具として導入し作成した『老子想爾注』と『真誥』の索引は、私たちがこの二種の文献を解読するのに役立ちましたし、また別の方面では、中国の道教研究者がコ

ンピュータを用いて基礎作業を行い始めるのに、見本となるモデルを樹立したのです。

吉川忠夫教授も私の古い友人であります。吉川氏の御父君の中国詩歌についての研究は、大学時代に耳に致しておりました。吉川氏の厳格な学問研究の態度、方正な作風、氏の著作には、中国の乾嘉学派の学風を感じます。博引傍証、言には必ず拠るところがあるのです。ほかに、氏が主催する中国中古道教の研究は、『真誥』はいうまでもなく、論文集も皆、高水準のものです。

私が1993年に京都大学人文科学研究所に滞在しておりました時、吉川忠夫教授が書籍解読の研究班を主催されていることは存じておりましたけれども、ただ私の日本語の能力がたりないばかりの故に、傍聴を希望しなかったのです。しかしながらこの研究方法は疑いなく「三人よれば文殊の知恵」のよい方法なのです。私たちのところでもこの方法を、「集体攻関（衆人一丸となって難関を攻撃する）」と称しております。私たちの上海社会科学院宗教研究所が既出版した著作、たとえば『中国社会主义時期の宗教問題』、『上海宗教史』、『人・社会・宗教』等は、いずれも皆、「集体攻関」の作品であります。

さらに取り上げておきたいのは、中国が改革、開放を実行してのち、中国学术界が改めて再び世界に向き合った時、私は主に京都大学人文科学研究所が編纂する『東洋学文献類目』を通じて、世界を理解し、同学を知ろうとしたのだということです。中国ではある一時期は「万馬斉瘖（皆が鳴りを潜める）」でしたので、中国大陸の研究文献は多くありませんでした。そのころ、『東洋学文献類目』の紙幅も大きくはありませんでした。のちになって中国の「万馬」が「奔騰（皆が一斉にはなまわり活気にみちる）」しはじめ、大陸の文献もどんどん増えていきました。

総じていえば、京都大学人文科学研究所の何代もの学者が共同で作りに上げてきた学風とは、研究資料が豊富かつ詳細確実なものであること、研究方法が伝統的かつ多少の新機軸をもつものであること、研究題目が重要かつ価値あるものであること、研究の結論が客観的で信頼でき、分量があり、かつある時代、ある国家、ある領域内を代表する高い水準のものであること、でありましょう。もちろん私自身も気づいて注目していることですが、京都大学人文科学研究所の中でそれぞれの教授の興味と方法に差異があるのは当然として、ひとりの教授の先の一時期と後の一時期にも差異がありうるのです。たとえば小南一郎教授は、もともとは中国古典文学を専攻し、優れた成果を挙げていまし

た。1994年に氏の話が多くの人類学の新しい観点に及ぶのを聞いて、彼が人類学の角度から中国の文物を考察した文章をいくつか読みました。私は当時、もし人類学の角度からあらためて中国文学の発展過程を再検証するならば、小南一郎教授はまったく新たな中国文学史を一冊書けるかもしれないと感じたものです。また一例をあげれば、麥谷邦夫教授はコンピュータを使ってたくさんの道教文献の索引を編纂していますが、もし彼の仕事が重視されるようになれば、あるいは世界規模の道教文献のデータベース編纂センターが出現して、従来数代、はなはだしきにいたっては数十代かけてようやく解決されていた問題が解決されるようになるかもしれません。

80年代、京都大学人文科学研究所の教授達は、絶えず中国大陸を訪問、調査に見えられました。90年代後半になりますと、その人数は明らかに減少しております。これはおそらく日本経済が下降した影響を受け、研究経費が削減されたことによるのでしょう。その一方で中国は今まさにすさまじい勢いで発展している、これは中国の過去と未来を研究することを主とする研究機関にとっては、まことにいても立ってもいられない気持ちにさせられることでしょう。

私は幸いにも、1993年から1994年の間、京都大学人文科学研究所で9ヵ月、研究・調査を行いました。私の来日経験から知りえたのですが、私が日本で勉強、検討をおこなうために、麥谷邦夫教授と吉川忠夫教授は多大な心血と労力を注いでくださいました。研究経費の捻出、招聘手続きの仕上げ、入国ビザの申請から宿舎の予約、飛行場への送迎など、みな教授達自らがしなければなりません。ひとりの外国の教授を招聘すると、すぐ自身の研究・仕事と家庭生活に影響してしまうのです。こうしたことは、私のように京大人文研に来た人には、心のうちにはっきりわかっていることです。ですから日本に参りまして、私はすぐに二度と教授方にお手間を増やさせたくないと思うようになりました。この点に関しては私たちのところと異なります。私たちのところでは外事部門があり、非学術的な事務は全部そこが受け持っているからです。

京都大学の人文科学研究所の図書資料の収蔵は豊富なものですが、1993年に滞在した時にはあまり利用しませんでした。私の研究課題がさほど中国の古代文献を必要としないということもありましたが、率直に申しますと、建物の構造により閲覧室の照明があまり明るくなかったこと、閲覧時間が短すぎることで、くわえて研究所の付近に昼食をとるのに便利な場所が少なかったためです。ですから私は京

都大学付属図書館のほうを利用することが多く、書籍を借りると修学院の京大国際交流会館に戻って仕事をしたのでした。

希望

1998年から1999年にかけて、私は幸あって東京大学東洋文化研究所に赴き、蜂屋邦夫教授の援助のもと、10ヶ月間研究に従事しました。その間にはっきりと感じたのですが、東洋文化研究所の研究方針はもう、東北アジアから東南アジアと南アジアに転じる兆しをみせていました。1999年、京都に祇園祭の調査に赴いた折、麥谷邦夫教授のお話からも、京大人文研もまた研究方向を再検討する時期に来ていることを知ったのです。今日、この書簡を受け取りまして、これがすでに喫緊の課題となっているのだらうと考えております。

この問題は私たちのところでも実際、すでに検討し実践してしばらくたちました。この点に関しては、ただ中国の高等学院の大規模な合併と整理統合、大学が新設する系、科の絶えざる増加、および私たちのところのような国家の科学研究機関の研究人員が発表する研究成果が絶えずテーマと領域を変え続けていること、などの事柄を辿っていきさえすれば、みなさんにはすぐにおわかりになるでしょう。私は1985年から所長補佐を担当し、のちには副所長、所長代理、所長を歴任して1994年年度末の解任にいたるまでずっと、身をもってこの変化（何を研究するか、及びいかに研究するかという変化）を経験し、またこの変化が所長の私にもたらしたプレッシャーをずしりと重く感じてまいりましたが、どうしようもありませんでした。

京都大学人文科学研究所東方学研究所は、中国の問題を専門に研究する機関ですから、中国社会に今まさにどのような変化がおこっているのか、それにつれ中国の学術にどのような変化が生じているのか理解すること、これは非常に重要なことでしょう。中国社会にいかなる変化が生じているのか、この点については私は何もいう必要がありません。著名な狭間直樹教授をはじめとする専門家が、半日でも一日でも語り得ることでしょう。中国の人文と社会科学の学術研究は、20年にわたる努力を経て、最低限の部門は大体揃いましたし、各学科の領域ではいずれもみな纏まった研究成果を世に問うております。くわえて、学科のリーダーの新旧交代もおおかた果たされ、それぞれの学科はみな新しい研究員の一群をそろえております。中国自体が育ててきた研究員もいますし、アメリカや日本から来た研

究者もいます。研究方向の確定については、全体的に言えば基礎理論研究の「為す所有り、為さざる所有り」なのでして、特に中国の現実問題の研究について強化しています。そして中国の現実問題の研究の方面では、さらに現実問題の理論研究と応用研究（対策研究と諮問研究を含む）に分けております。こうしたことを理解してしまえば、京都大学人文科学研究所の今後の発展にとって、中国学研究をリードする立場を維持していくことが、極めて重要なことだとわかります。

京大人文研の古い友人として、私は京大人文研の東方学研究の今後の発展に対し、以下のようないささかの希望を持っております。

第一に、自己の学術の伝統を堅持し、自己の学術の特色を保持して、中国の歴史・中国の古典文献・中国思想史・中国宗教・中国の文物・中国の文字言語の基礎理論の研究を強化することを続けていただくことです。これらの領域の研究は、従来から京都大学人文科学研究所の中心であり、しかもこれらの研究は中国の過去と現在を認識するだけでなく、未来を予測するに絶対に欠くべからざる理論の基礎ともなるのですから、長期的にいえば、こうした基礎理論の部分の研究はゆるがせにできません。中国は現代研究と応用研究を強化すると同時に、この方面の研究もけっしてゆるがせにはしていません。各大学と研究機関はいずれもみな、幾らかの人数を「坐冷板凳（冷や飯を食わされる閑職につける）」に配置し、「十年 寒窓 人の問う無し」といった清貧の学究生活を送らせて、ある領域の研究を後代に伝承していくように取り計らっております。私たちのところの中国宗教研究についていえば、私たちは現代の宗教問題研究（たとえば新宗教の問題、宗教と民族関係の問題等）を強化すると同時に、ずっと各種の宗教の基礎理論研究をおこなっております（たとえば『中華大道蔵』の編纂、各宗教の断代史を含む歴史研究、各宗教文献の研究等）。

第二に、自己の特色を保持すると同時に、絶えず新しい研究方法と研究手段を模索し、不断に新しい研究領域を開拓していただきたいということです。京都大学人文科学研究所のような伝統ある著名な研究機関にとっては、新しい問題を模索し新しい方法を採用する最も重要な点は、従来から慣れ親しんでいる文献研究から脱皮して、これまで慣れ親しんできた書齋の生活から抜け出すことだと思います。

日中関係および日本と中国が今現在直面している問題に指針を向け、研究課題を定め、歴史を遡り、現在を分析し、未来を展望した上で成果を出すならば、両国の関連分野は、

京大人文研の研究成果によって大いに裨益されるというものです。こうした話は、私自身の経験にもとづけば、言うは易く行うは実に難きことです。しかしながら私たちのところではまさにこのように行っているのであり、すでに苦心惨憺の運営も数年を経ました。もちろん私は決して文献研究の重要性を否定しているのではありません。しかしながら文献研究にも突破が必要です。つまり、ひとつには絶えず既存の文献を突破し、新しい文献を発見し、新しい文献を研究し、新しい文献を利用するということ。もうひとつは、文献を利用するにも、新しい方法と新しい角度が必要であるということ、既存の伝統的な方法以外に新しい視点をもち、現代の新しい科学技術の方法を利用するべきだということです。こうした結果、きっと京大人文研の優秀な学術の伝統は常に活力に満ちたものになると思います。

第三に、中国に出現した新しい状況、新しい問題に関心を払い、東北アジア・東南アジア・南アジアおよび西アジアなどあらゆる中国周辺の国家の問題に関心を払っていただきたいということです。ちょうどあなたがたの「21世紀の東方学」趣意書の中にも触れられておりましたように、前世紀の近代化の波はアジアの伝統的社会をきわめて複雑なものに変えました。この「複雑」とは、ひとつには、それぞれのアジア国家自体がみな非常に大きな変化を遂げた、たとえば中国の改革・開放、中国現代の多面的な経済・社会・文化と倫理などの複雑な状況を指します。このゆえに中国の現代の問題、ひいてはその他のアジア国家の新問題を研究するには、膨大な努力を費やすことが必要になりました。極力、何度も中国に来て、あちこち見てまわってください。もうひとつ重要な面は、アジアがどんどん小さくなっているということです。国家と国家の関係がどんどん密接になって、国家と国家がまるで「横町のお隣さん」みたいになってきています。中国の問題を研究するには、同時に中国周辺の国家、および中国とこれらの国家の興隆、歴史と現実をも研究せざるを得ないのです。

最後に、私の本業であります中国宗教の問題についても少し、述べておきたく存じます。皆様ご承知のように、中国は国教を有する国家ではありません。しかも先の1世紀のある年代には、短期間のうちに中国地上の宗教を消滅させようともくろんだ人々さえおりました。けれどもこうした愚の骨頂というべき挙動はことごとく失敗に終わった、というのが歴史の事実であります。現在私たちは、中国の宗教の長期性・群集性・複雑性について、すべて新しい認識を有し、かつまたそれを国家がとこしえに安穩であるた

めの政策問題にまで関係づけて対処しています。ですから宗教研究は今もまだ強化中であります。北京大学・武漢大学・南京大学・復旦大学などの大学が、相次いで宗教系と宗教専科を設立したことは、その標識にほかなりません。ですから、私は京都大学人文科学研究所も中国宗教の研究を従来どおり重視し続けられるように望んでおります。

自然科学の領域では、新しい研究成果を生産力に転化させようとする、専門の仲介機関、専門の中途試験をおこなう工場、長い過程を必要とします。しかし人文科学と社会科学の領域では、この転化の過程はさらに長大な時間を必要とし、より多くの努力を必要とするかもしれません。研究成果についても（たとえば上海市社会科学研究所の一等賞を受賞した『金文大詞典』）、その社会への効果と利益は必ずしも見出せるとは限りません。しかしながら、こうした成果は人類が自身の過去と現在を認識し、および今後の生存、発展を獲得するために、最終的には役にたつものとなるでしょう。社会の有識者はこの点をはっきりとわかっています。まさにこれが故に、京都大学人文科学研究所の友人たちが新しい東方学研究の方向を模索する中で、大きな成功をおさめ、また新世紀の世界の中国研究のためにひとつの模範となるモデルを樹立されることを、私は誠心誠意のぞんでいるのです。

北白川、修学院への想いは偲べども言い尽くせませんし、京都大学人文科学研究所への懐旧の念も語りつくすことはできません。

もし、不適切な言がございましたら、ご批評いただきますようお願い申し上げます。

上海社会科学院宗教研究所前所長

香港道教文化資料庫執行委員

上海城隍廟學術顧問

陳耀庭

アラン・チャン（シンガポール国立大学人文社会学部
副学部長）

2001年12月13日付のお手紙にて、貴研究所の研究活動についての評価を示すようにとのご依頼がありました。私はぜひとも、その手続きのお手伝いをいたしたいと存じます。私は、自分の専門分野であります中国の伝統的な哲学・宗教に関する研究についてだけコメントすることにします。

1. 従来の研究活動について

研究内容 貴研究所は中国学において、古くからの格別の伝統を備えています。このことはまさに貴所の「研究内容」に反映しています。私に関係の深いお仕事をしておられる麥谷邦夫教授は、道教研究において第一線の専門家です。また小南一郎教授の研究は、国際的に高く評価されています。私自身京都滞在の折、光栄にもお二人にお会いする機会を持ちました。しかしながら東方学研究部には、先秦時代の哲学について正教授がおられないようですが、これは意外なことでした。

国際協力体制 貴研究所は外国人研究者を受け入れるにあたり、大学の規則に従わなくてはなりません。これはきわめて事務的な手続きですけれども、私は貴研究所が直面している制約についてもよくわかっております。私の印象では、全般的に言って貴所は応募を待ち受けているのであって、適切な客員を自ら決定し、これを招聘するということは逆の態度であるように感じられます。少数の客員研究員を選考し、これに対して毎年研究費を提供することを貴所において検討されてはいかがでしょう。これはより活発な国際学界を作り出すのに役立つのではないのでしょうか。シンガポール国立大学人文社会学部は、数多くの日本の研究機関とのあいだで交流協定を結んでいますので、同様の協定にむけて貴所と協議することを歓迎するでしょう。

研究成果の公表 私の見るところ、現状では言語が障壁になっています。ほとんどの中国研究者は日本語を読むことが出来ますが、そのうちの多くは日本語を流暢に話すことができません。私の考えでは、外国人研究者が日本語を学ぶためにあらゆる努力をすることは必要ですが、貴部においてもまた、英語さらに中国語での会話を、とりわけ若いスタッフが、今よりもさらに上達させるように奨励することが望ましいのではないのでしょうか。そうすることによって、国際的な協力関係を拡大することができるでしょう。研究成果の出版に関しては、貴研究所の出版物を私はよろ

こんで受け取るものです。また過去の出版物の一部をオンラインに掲載することも役に立つのではないのでしょうか。

文献情報サービス体制 京都滞在の折、私は貴所図書室と文学研究科図書室とのあいだをいくども往復しなければなりません。とくに閲覧・借用の際に書名をいちいち書かなければならないというのは、時間の浪費です。しばらくしてその手続きには慣れましたけれども、貴所においては以下のような点を検討されることを私は提案します。①一般的な蔵書を開架とすること（つまり、貴重書の蔵書だけを閉架とすること）、②外国人研究者に蔵書の持ち出しを許可すること。

2. 将来の研究教育活動について

研究内容 あらゆる点において優れている、などというのはどんな機関にもあり得ないことでしょう。むしろ、優先順位を明らかに定め、戦略的に重要な分野で秀でる試みが必須なのです。私は人文研が伝統的な中国学を主導するものと見ており、中国学の立場による研究の重要性を主張し続けてほしいと思います。そして六朝時代についての貴所の強みは保持しつつも、すでに述べたような初期中国哲学についての何ほどかの配慮もまた重要でしょう。

国際協力体制 厳選した外国機関との交流協定は促進されなければなりません。そのためには、英語と中国語の双方に堪能なスタッフを備えた国際交流オフィスを立ち上げることも検討することになるでしょう。この点に関して私は、外国人研究者が使うことのできるオフィス（共同利用を前提に、コンピュータとインターネット・アクセスを備えたもの）があればと思います。オフィスのためのスペースの欠乏は、ほとんどの大学が直面している問題です。これは、理想的な状況ではありませんが、避けようのないことでもあるでしょう。また、京都に研究者を引きつけるためには、適切な住居を見つけるためにもう少し支援が必要ではないかと思えます。

研究成果・情報公開の方法 人文研はオンライン・リソースの開発を主導しています。そうした点から、私は重要な成果を期待します。

教育体制 大学院は歓迎されるべきことでしょう。私は、自分の学生を貴所に推薦することをよろこんで検討したいと思います。しかし、大学院が設置されるときには、必要な基盤（図書室へのアクセス・住居・競争を前提にした奨学金など）が整備されていることが必要でしょう。

この機会に、過去における東方学研究部のたいへん優れた業績を慶賀するとともに、皆様の将来へむけた試みが、上首尾に進みますことを祈念いたします。

シンガポール国立大学人文社会科学部副学部長
アラン・チャン

スタファン・ローゼン（ストックホルム大学東洋言語
研究所教授）

京都大学人文科学研究所（以下、人文研）に関する過去及び将来の研究活動について卑見を求められた、2001年12月13日付のお手紙まことにありがとうございました。この重要な問題について卑見を求められたことを名誉と感じております。しかし同時に私は、お手紙で示された諸問題のあらゆる面に対し十分な見解をお示しするのに堪えるものではないことを、はっきりとお断りしなければなりません。従いまして、私は確信をもてると思える点に答えを限定したいと存じます。

1. 過去の研究活動

研究内容 私は、主に中央アジアに若干及び中国学の分野で行われてきた研究を存じております。目下進行中の研究及び現在は終了した研究の両者について点検させていただくならば、これらを遂行するのに拠ったその高度な学術的水準と同時に、その学問的な幅の広さと深さにも感銘を受けることでしょう。これらの研究班の一部は通常体制としてセミナー形式を採り、かつ3年から5年にわたって運営されますので、課題を学問的に扱う上ですぐれて好適ならしめる可能性をもつ環境を生み出しています。（会読を通じて）かかる方法で精緻に吟味を経た版本や写本資料等は、極めて高い信頼度と完成度で他と一線を画する潜在力を有しており、これこそまさに、私が人文研で生み出された業績に認める際だった特色にほかなりません。しかしながら、その質的要因のみが学問上の優秀性を必ずしも保証するものではないことは、申すまでもないでしょう。それらが優秀な知的指導力と結びつく必要があることも等しく明らかであります。私が判断する限りにおいて、人文研は高水準の学問に要するこれら二つの必要条件に高いレベル

で恵まれてきております。北ヨーロッパ的な見地から申しますと、この人文研の組織機構は、私どものところでは実現するのがなかなか困難なたぐいのものであります。

国際協力状況 この点に関しては、人文研の客員教授としての自らの経験と、スウェーデンにおける人文研所員の方と私との提携状況からだけ申し上げます。個人的レベルでは、人文研の外国人研究者と申しますのは、研究施設・学術交流・経済状態・蔵書資料など、その状況はこれ以上望み得ないものでありまして、これら全てが最適な研究環境を生み出す要因となっています。海外（スウェーデン）での人文研所員を代表する方達と私との学術的対応においては、私は、我々の協力関係を相当に促進させた二つの特質に思い至ります。即ち、日本人研究者の側の効率性と優れた企画力、及び彼等が取り組んできた事業に関して相応の資金が利用できることがそれであります。このような資質・資金及びトップレベルの研究機関としての人文研の令名こそが、私どもの最も貴重とする資料を無条件で人文研の随意に委ねるとした、スウェーデン政府の決定の背後に存する主因であります。

研究成果の出版と情報公開 あらゆる国際的基準から見ても、人文研の刊行物は全般的に内容の広汎さも専門性も共に高い水準を有していると認められねばなりません。しかしながら大半の場合、公刊に際して選定される言語が問題となります。人文研が主に日本の方々に向きあう国内機関としてある事実は評価されねばなりません。それでいてなおそこで行われる研究の多くは明らかに国際的性格を帯びています。それゆえ、英文の公刊物を増加させることが強く求められております。人文研の研究成果に関心を抱きながらも日本語が読めないという潜在的読者は、相当数にのぼるはずで、この点において、英文版人文学報は本当に貴重なものですが、国際性という観点からするとまだ十分とは申せません。人文研の業績の国際的普及の問題は、言語問題と密接にかかわっています。英語での刊行を増大させると共に、英語（もしくは他の言語）でのより広汎な宣伝の必要性も増大します。これに関連して申しますと、単にウェブ・ページのみでの宣伝活動は、最善の解決には恐らくならないと思われま

図書館サービスの状況 私が京都にいました時に利用した全ての図書館は非常によく機能しており、私の専門分野から判断する限り、素晴らしい蔵書を備えています。

2. 将来の研究及び教育活動

人文研の将来の研究及び教育活動についての卑見に関しましては、一般的な考察に答えを限定させていただきます。

人文研は、1929年以来、様々な形態と管轄下で活動を続けてこられた研究機関です。多年にわたって公表されてきた、多面的な学術活動と豊かな学問的成果は全て、それらが生み出された各時代の関心や基準に拠って忖度し判断されねばなりません。人文研の歴史において、これらの態度の変遷はまた、新たな基準や新たな関連点を反映した何度かの改組（1938年、1946年、2000年）をもたらししました。それゆえ、貴所が目下、現代世界への対応をせまられているという新たな変化に直面しているということは、あえて驚くに足りません。

これは、私から見ますとまったくよいことではありますが、また同時に大きな危険を伴うものでもあります。確かに伝統的社会は急速に変貌を遂げており、社会は以前より非常に複雑になってきております。また、世界が環境的危機や種々の深刻な生命倫理上の問題に直面しつつあるのもまた事実であります。これらの全ての問題に対して、学界は真剣に注意を払わねばなりません。しかしです、これが、これらの問題の研究と伝統的学問の探究が対立するということを果たして意味するのでしょうか。あるいはもう少し率直に言いますと、伝統的学問の全て、若しくは一部が、「現代世界」なるものより緊要の関係を有する研究の余地を作るために犠牲にならねばならないのか、ということです。私は、連続シンポジウムの趣意書の要約の中に、伝統的社会がより複雑なそれへと急速に変化していることのゆえに、「非実利的な学問が、複雑化した現実社会との接点を失いつつある」との文言を拝見しました。これは、私には危険なことに思えます。この言明には、全ての（人文学的？）学問研究が、その存在意義を有するためには、「現実世界」と密接に接触せねばならない、ということが前提とされているように見えます。あくまで私見ではありますが、これは随分と危険な、あるいは間違った考えです。人文学の基礎研究は往々にして地味で面白みに欠ける仕事です（これについては、例えばテキストや写本の校訂や考古資料の公表などを我々は数えあげねばなりません）。しかし、これは我々人類共通の財産として不可欠なものです。より長期的展望においては、これが、他のあらゆる研究分野と同様に、我々の住む世界を理解する上でまさに「有益」かつ重要であることが証明されるでしょう。

現在まで京大人文科学研究所は、世界的な意味で人文科

学の発展に少なからぬ国際的責務を果たされておられます。人文研の将来の事業においてもこの伝統が継続されることを、私は熱望してやみません。あり得るあらゆる誤解を避けるため、私はあらためて、「現実世界」の目下の問題を扱う研究が明らかに必要であることは強調しておきたいと思えます。ただ私の言わんとするところは、この種の「新しい」研究が、それが他の研究より「有益」であるとの誤った信念の下において、伝統的基礎研究に犠牲を強いるものであってはならないということです。人はあるいは、人文研は例えば環境問題の研究に実際に適当な場か、と問うことがあるかも知れません。世界には恐らくかかる「目下の問題」を研究している場は多数あることでしょう。しかしながら人文研の如き優れた美質をもつ人文学の研究センターは誠に寥寥たるものなのです。ですから、卑見の如く、現在の機構をより現代的にしようとして、その独自性を失う形で解体する前に、よくよく熟考することが不可欠と考えます。長い年月にわたって人文研が体現してきたような、この種の優れた人文学研究が、極めて重要なものであるという考え方は、今やヨーロッパの多くの国で盛んになってきております。このグローバル化の時代においてこそ、伝統的人文学の必要性がより際だってくるということが、人々にも感ぜられていくことでしょう。減り続ける資金をむしろ科学や社会科学に配分しようとする傾向がある大学という環境において、人文学研究がとりわけ存続に困難な時代を迎えていることはよく承知しております。しかし、スウェーデン社会科学先進研究コレギウム（ここは現在人文学研究も含めた領域を広げています）やベルリン・ヴィッセンシャフトコレグ等といった、人文研の如き研究機関の必要性がますます認識されるようになってきており、これらは全て、世界中から研究者を招聘して国際的舞台で活躍しております。

東方学大学院の設立構想は、恐らく積極的に研究所のカバーする領域における専門家を多く養成するのに貢献されんとし、かつまた人文研で生み出された研究の成果を広い層にもたらさんとされる事業であると拝察します。しかし、繰り返しますが、この貴所の新たな部門は十分な経済的手段を伴って成し遂げられることが、所員の方々の研究に利用できる時間を劇的に減少させることを避けるためには不可欠です。

これらの蕪雑な感想を以て、卑見を申し上げる機会をくださった皆様へのあらためてのお礼とさせていただきます。私は、人文科学研究所の将来を築くという皆様の重要な事

業が成功し、その存続の名誉を担われることを祈念しております。

2002年1月30日

ストックホルム大学教授
スウェーデン王立アカデミー文学歴史考古部門会員
ストックホルム王立科学アカデミー
スウェン・ヘディン協会幹事
スタファン・ローゼン

虞和平（中国社会科学院近代史研究所副所長）

ご来示の趣意承りました。貴研究所の発展の盛況についての問い合わせにあずかり、まことに名誉に堪えません。

私は貴研究所の発展状況についてほとんど存じておりませんので、優れた見解は何も提起することはできませんが、ただ思うところにつきまして、わずかながら以下の卑見を呈したいと思います。

1. 京都大学人文科学研究所の既存の研究活動に対する見解

私の印象では、京都大学人文科学研究所は日本さらには世界で最も著名かつ功績ある東方学研究機関の一つです。

研究の面では、貴研究所は優れた研究条件を具備するだけでなく、際だった研究成果を収めてきました。貴研究所の図書館の収蔵する大量の中国と東洋学関係の貴重な資料は、貴研究所所員に豊富な研究資源を提供するだけでなく、中国及び世界各国の東洋学研究者の関心と呼ぶところでもあります。私自身もかつて短期間の訪問機会を利用して、貴研究所図書館で、中国国内では見ることが困難な、近代中国商人と日本商工会議所に関する多くの資料を収集し、あわせて貴研究所所員と図書管理人の温かい接待を受けました。

長期的な研究の中で、貴研究所は自らの特色を具えた研究内容と研究方法を形成してきました。例えば自らの資源の優位性を利用して、文献研究を中心とし、着実に中国の歴史文化の変遷と国際交流を研究してきました。ここ数年はまた、重点的に梁啓超とその思想研究、近代中国の都市と農村の研究等を進め、いずれも衆目を集める成果をお

さめました。研究と分析方法の上で「共同研究」の方式を採用しただけではなく、グループによる力を発揮し、そのうえ文献考証と特定のテーマの探求及び総合的な分析方法を活用し、いくつかの詳細で専門的な問題に対して掘り下げた研究を行い、またある重要な課題について全体的な分析を進め、個別研究の上に全体的な分析をうち立て、誠実に信頼できるものを産み出しています。

国際協力の面では、貴研究所はかなりの水準で国際東方学研究所の中心的な役割を果たしています。これが最もよく表れているのが、貴研究所が計画的に毎年外国の著名な研究者を貴研究所への訪問研究に招請していることで、何人かはさらに貴研究所の研究プロジェクトに直接参加しています。これは外国人の研究者に得難い研究機会を提供し、国際学術交流を推進したうえ、さらに貴研究所の国際的な知名度を上げており、堅持する価値のある優れた制度です。中国社会科学院近代史研究所の研究スタッフもまたこの制度から多くの利益を得ており、謹んでここに心から感謝の意を表したいと思います。しかしながら、貴研究所の研究スタッフの国外における学術活動は、我が研究所の理解している状況から申し上げますと、比較的少なく十分に活発ではありません。

2. 京都大学人文科学研究所の今後の研究・教育活動への期待

総じて申し上げますと、貴研究所が元来保持している研究内容について適切に整備・開拓を行い、時代の発展的な要求に適応し、東方学研究において更に大きな貢献をなし、国際的な学術上の地位を継続的に保持かつ向上することを期待します。また同時に、貴研究所のこれまでの学術発展を継承することに配慮され、学術的な断絶が生ずるにいたらないことを期待します。

研究の面について申し上げますと、私は貴研究所が、社会の要求に的確に対応できるような研究 = 教育システムを形成し、中国を研究の重点としつつ、努めて正確にその現在と未来の様相を把握し、同時に中国文化の歴史と伝統を深く理解しようとすることに強く賛成いたします。これにより、私は貴研究所の今後の研究の趨勢が、時代の発展的要求から出発すると共に、従来保持してきた研究の特徴と優位性に配慮するようになれば、中国の伝統社会の変遷及び、それと現代社会と未来社会の関係を研究の重点とすることが可能であるように思われます。同時に、適切に研究の視野を広げ、制度の変革・国際関係・国家や地縁を超えた関

係・社会経済等の分野の研究力を増し、あわせて研究時期を適切に現代から現在にまでのばしうものと考えます。研究方法について申し上げます、時代の発展と学問の開拓に相応しい新方法、例えばフィールドワークの方法を採用し、またよく貴研究所の学術の特徴を体現した伝統的な方法を適切に保持すべきです。さもなくば、新しい研究体制と方法が形成されて明確な成果を収める前に、貴研究所は自らの学術的な特色と優位性を失いかねません。資料の収集事業については、貴研究所の今後の研究の発展方向と所蔵資料に基づき、不足している貴重な資料、特に近現代社会経済史の領域の文献資料を適切に補充すべきです。いかなる研究方向をとるかに関わらず、文献資料は絶対に不足してはならないものです。

国際協力の面では、従来の制度は継続堅持すべきですが、適切な調整を計画すべきです。貴研究所が中国を21世紀の重点的な研究対象として予定した以上は、中国の関係する研究機関との交流と協力を強化すべきでありますから、以下に記す様相の異なる四つの方式を採用できないでしょうか。

- (1)中国人研究者が貴研究所を訪問し研究・講義するという招請を適切に増やす。
- (2)中国の関係する研究機関を選択し比較的固定したパートナーシップを確立し、同時に何人かの中国の著名な研究者を招待して貴研究所の名誉所員あるいは客員研究員を担当させる。
- (3)比較的重要なテーマを設定し、中国の関係する研究機関と共同研究を推進し、或いは共同で学術討論会を举行し、学術刊行物を出版する。
- (4)貴研究所の所員もまたより多く中国で訪問研究と学術交流を進め、中国の関係研究機関の名誉所員あるいは客員研究員をつとめる。

教育活動の面では、私は、貴研究所が東方学大学院を創設して大学院生の教育を推進しようとされていることに、強く賛成します。貴研究所の人材資源と学術資源を以てすれば、必ずや高レベルの東方学の研究者を養成することが可能でありましょう。しかしながらそこで学ぶ学生は、いずれも中国文献学と近現代中国学の基礎を修得する必要があります。それゆえ、この2分野の知識は軽視できませんし、大学院生を募集・採用する時にはこの2分野の知識の基礎を求め、または入学後にこの2分野の課程を設置する必要があります。研究者養成の方法としては、国際協力の方式を採用し、貴研究所の大学院生を中国で学習・研

修させる一方で、中国の大学院生を貴研究所で学習・研修させ、相互交流を促進し、ともに向上してはいかがでしょうか。

以上、述べて参りましたところは、全て妥当であるとは限りません。ただ、参考に供するのみです。

2002年1月12日

中国社会科学院近代史研究所副所長 虞和平

ヴィクター・H・メア（ペンシルヴァニア大学教授）

12月13日付のお手紙にて、貴研究所の従来の研究活動および今後のそれについての私見をお問い合わせの由、感謝いたします。私は、寄せられた問いすべてにお答えしようとするものではなく、いくつかの点にのみ焦点を絞りたいと存じます。

まず私が希望いたしますのは、中国研究における考古学を含むフィールドワークの意義について考慮していただきたいということです。特に現地調査に基づく中国研究に関しては、さらに広く国際協力を進めることが大いに求められているのです。

また言語学も今後重視していただきたい分野です。とりわけ、古典的な漢籍に対する伝統的な文献研究から、社会言語学・歴史言語学・理論言語学による新たなアプローチへと、いかにして進むべきなのかについて、貴研究所には考究していただきたいのです。

貴研究所には、更新が活発に行われているウェブ・サイト（日本語および英語）を運営していただきたいと思えます。そしてそこには、以下のようなことを載せていただきたいのです。

- (1)部局構成員の氏名・職位・研究分野ないし関心。
- (2)研究所で行われた講演と公刊された論文の要旨および記録。
- (3)蔵書へのアクセス。
- (4)関連するウェブ・サイトへのリンク。

中国学にかかわる研究が、インターネットを介してアクセス可能なデータベースその他の情報源に、今後ますます大きく依拠して行われることは明らかです。おそらく人文科学研究所はこのような新しいタイプの研究の最前線に立

つことができるでしょう。そしてそれこそが貴所のめざすところであるのなら、必然的に電子メディアを十分に利用するための専門的スキルを備えた者数名を雇用しなければならないでしょう。

最後になりましたが、厳選したテーマについて注目に値する国際会議を幾度か開催することを試みていただきたいと思います。全世界から最適の人材を呼んでください。会議は小規模（せいぜい10人から20人まで）にとどめるのが望ましく、議論にたっぷり時間をとれるように計画していただきたいものです。

この意義ある試みのご成功を祈ります。

2001年12月26日

ペンシルヴァニア大学アジア・中東研究科教授
ヴィクター・H・メア

葛兆光（清華大学中文系教授）

貴所よりお便りをいただき、大変光栄です。私は1994年、1998年、および2000年の3回にわたり京都大学を訪問し、いずれも人文科学研究所に参る機会を得、『東洋学文献類目』『東方学報』その他の出版物を通じて、人文研の学風や学問的な方向性に対して深い印象を持ちました。ことに傑出した貴所の研究者であられる吉川忠夫先生・小南一郎先生・麥谷邦夫先生・高田時雄先生・金文京先生・狭間直樹先生などの方々と交流を通じ、貴所の良好な学風と特色に富む研究方針を、いっそう深く感得いたしました。

ここ十数年来、私はたえず京大人文研の方々の研究古代中国の思想・知識・信仰研究、そして近代中国研究

に相当の関心を向けております。私はこれらの研究は世界的に一流のものであると信じておりますが、それはこれらの研究が、一方で豊富な歴史文献と資料を基礎とし、また一方で深く鋭い方向性と方法を備えているからであります。私はかつて吉川忠夫先生の編著『六朝道教の研究』『唐代の宗教』を評論した二編の論文の中で、「京都の中国学は一貫して文献と歴史の研究をやや偏重しており、特に京都の学風を代表すると言える京都大学人文科学研究所はむしろこのような方針の延長線上にある」と言いましたが、しかしこれは京大人文研の研究者が理論を重視しな

いというのではなく、「日本の学者、特に京都の学者は理論を直接に論文にすることは少ないが、理論化を研究上の意識としており、それにより彼らが文献を読解し、歴史を分析する際の基礎としている」（拙稿「宗教史研究における文献学と歴史学の方角」吉川忠夫編『六朝道教の研究』を読んで）、『書品』1998年第5期。「唐代宗教の歴史の新たな総括」吉川忠夫編『唐代の宗教』を評す、『仏学研究』2000年、総第9期、中国仏学研究所）ということです。これはきわめて優れた学問的方向性であり、この学風は伝統的な文献学と歴史学の厳密な考証を継承しつつ、現代社会科学の広い視野を兼ね備えたものであると、私は考えております。

長年にわたり、京大人文研は国際交流において、特に中国の研究者との交流を頻繁かつ密接に保ってきました。もちろん何れの国際的な研究所にも国際交流はありますが、京大人文研が私に深い印象を与えたことが二つあります。一つは京大人文研が開放する豊富な図書資料が、私も含めて多くの中国の研究者をひきこむ重要な要素であることであり、二つめは、研究班において会話が謹厳かつ持続的に行われ、このような研究方法と形式とがしばしば中国の研究者をひきよせて参加させ、我々に大きな啓発を与えてくれることです。

以下、私の浅見を3点申します。

第一に、新たな国際的な学術環境にあって、私は京都大学人文科学研究所が世界一流の東方学と中国学研究の中心であり続け、伝統的な研究方法と新たな研究方向との間で、「新」と「旧」との平衡をとっていただくことを希望します。周知の通り、近年、東洋学、特に中国研究において、中国大陸・台湾・日本を問わず、学術の気風は新しい変化を迎え、学術の重点も変化しています。例えば新たな考古資料の解読や、それによってもたらされる歴史に対する新しい認識、また現代の新理論・新思想の影響のもとにおける、伝統的な文献学・歴史学的な解釈の枠組みに対する反省と改革、そしてまた、かつては軽視されていた周辺的な問題や学際的領域に対する新たな関心など、何れも相当に挑戦的な性格をもっております。伝統的な京都中国学も必ずやこれらの挑戦と向き合うことと思いますが、これに對しいかにして伝統的な学風を保ち、これらの挑戦にこたえてゆくかという点は、おそらく京大人文研が21世紀に直面する重大な問題でありましょう。

第二に、京大人文研が中国の学界との緊密な連携を保つこと、特に日本の研究者が中国の学界の現在の動向に注意

し、中国の学界の状況を全面的に把握されることを希望します。中国の歴史と現実において、現在、中国の学術は急激な変化の中にあり、過去の印象にとらわれていては中国を理解することは難しいからです。例えば、現代欧米の各種の新思潮が伝統的な文献学や歴史学に如何なる影響を産むのか、伝統的な研究方法や形式がいかに変化するのか、またたいへん古くさいとも見える昔ながらの問題がどうして改めて議論されるのか、思想史と学術史がどうして世紀の変わり目に議論の中心になるのか、久しく親しんできた学科体制がどうして疑義をはさまれているのか、などなど、ことによると日本の学界の趨勢と異なるかも知れませんが、このような相違点こそ日本の中国研究者の注意を要することであります。

第三に、現在の、世界の歴史・文化的な地図はまさに改めて区分し直されつつあり、かつては互いに関連しないとされた中国・インド・東南アジア・中東が、次第に変化を生じ、ある時は、「東アジア」が一つの研究単位とされ、ある時は「極東」が互いに関連する区域とされ、またある時は「東洋」が「西洋」に対応するひとつの共同体とされ、これまで分割されて異なる研究領域であった学科が、互いに関連を生じております。これまでそれぞれ独立していたイスラム教・ヒンドゥー教・仏教・道教・儒教などなどの宗教研究が、現在では新たな地理空間の中において見極められるべきであり、さらにそれぞれの異同と関連を研究する必要があり、よって伝統的にそれぞれ独立していた学科は改めて調整を施される必要があるのです。元来の学科体制をいかに改組し、これら新たな問題に対応してゆくのかは、おそらく中国及び日本の研究者に共通の問題であり、これも東洋学を中心とする京大人文研が考慮すべき問題でしょう。

『東洋学文献類目』と『東方学報』とは私が非常に敬服し、賞賛している学術出版物であります。『東洋学文献類目』は学界に素晴らしい資料の手掛かりを提供していますが、現在の問題は、中国の学術出版物が急激に変化している今日、伝統的な出版目録に見えない新たな学術情報をいかにして十分に理解し、採録するかということであります。例えば中国の90年代以降、多くの民間の学術刊行物があり、現在では公の出版物以上の水準をもっています。『東方学報』はもっとも水準の高い学術出版物であり、私は一貫してその内容に注意していますが、ただ少しばかり残念なのは、年一回のみの出版であること、また所外の研究者の論文、そして（中国語を含め）外国語の論文をより多く受け

付けることはできないのか、ということです。

京大人文研の学術研究を非常に尊敬しており、またこのような自己反省の努力をなさっていることにはさらに敬服しており、今後とも京大人文研と交流を続けることを切に希望いたしております。京都大学人文科学研究所のさらなる発展を心から期待いたします。

2002年1月2日、北京にて
清華大学教授 葛兆光

張豈之（西北大学名誉校長・清華大学教授）

お手紙拝受いたしました。それによれば、京都大学人文科学研究所の東方学は今後、新しい方向に発展しようとしているようですが、結構なことですが、お手紙には日本の東方学はもともと古典研究を重視していたが、今後は現代の問題にも注意しなくてはならない、と書かれていますが、これは重要です。現代中国を研究し、またそれを専攻する学生を育てることも大変重要なことです。

ただ、現代の問題にも注意しなくてはならない、とあるのはどういった問題を指すのでしょうか。貴研究所は人文科学の研究所なので、現代の問題も文化問題・学術問題を主とするのがよいのではないのでしょうか。中国の近代と現代の文化問題を系統的に研究することを、東洋学の研究重点の一つにすることが望まれます。

考古学をはじめとするフィールドワークを今後重視すべきだということも申し上げておきたいと思います。中国考古学は50年来、大きく発展しました。中国文化を研究するには、文献資料を参考にするだけでなく、フィールドの発掘調査にも注意しなければいけません。この点は非常に重要です。中国の古代文化の研究は、長らく文献資料の整理に終始していましたが、それではなかなか新機軸を打ち出すことはできません。文献資料とフィールド発掘（地下資料）を結合することによってはじめて、何らかの成果が得られます。

貴所が設立を計画しておられる東洋学大学院の学生は、ある期間中国で研修させて、中国考古学・中国文化を研究し、中国で直接、感性的認識を獲得させるとよいでしょう。これは特に大事なことです。中国は日本の隣国で、行き来

が便利ですから、計画が当を得たものでさえあれば、貴所の大学院の学生達は新しいことを多く学ぶことができますでしょう。

貴研究所の向後の研究教育活動の方向性については、おそらくとくに計画がお有りでしょうが、ご参考までにいささか意見を述べてみました。不適切なところがありましたらご指正賜りますようお願い申し上げます。

2001年12月25日 張豈之

ジョシュア・A・フォーゲル（カリフォルニア大学
サンタバーバラ校教授・プリンストン大学高等研究
所客員教授）

2001年12月13日付お手紙ありがとうございました。人文研の活動評価について、私はできる限り協力したいと存じます。

私が今から申しますことの土台となる経験がどのようなものかをご理解いただくために、過去25年にわたる私と人文研との関係をまず概観いたします。私が人文研と初めて関係をもったのは、1976年12月から1978年5月の間、大学院生としてでありました。これは単に私と人文研との初めての邂逅というだけでなく、京都大学、及び日本との初めての出会いでもありました。当時、私は竹内實教授に師事しておりました。先生は本当に私によくしてくださいましたが、私の方から近づこうとしない限り、ご自身の側から助けようと口を挟まれることはなさいませんでした。そこで、私は私自身の研究に没頭し、先生の五四運動研究会には数回参加させていただいたくらいでした。私は、日本を去る1ヶ月ほど前まで人文研図書室の位置も知りませんでした。文学部の友人達は私を本当によく助けてくれました。

1981年夏の私の日本への第2回目の旅もまた人文研及び竹内先生のご厄介になりました。この時は竹内先生には非常にご親切にいただき、多大なご助力を頂戴しました。

1980年代と90年代を通じて、私は日本を度々訪れ、人文研の同学の大きな助力に恵まれました。殊に狭間先生・森先生・石川先生には本当にお世話になりました。研究班は私が出席できるような夏期には通常開かれないのですが、研究班のある時はよく出席させていただきました。これら

は常に旧交を温め新たな友人を作る素晴らしい機会でした。

1996年から97年の間、私は人文研日本部の客員教授に招聘されました。私の責務の一部に、山室信一教授と共に研究班を運営するということがありました。これは私にとってわくわくする素晴らしい機会であり、私の日本語の能力は非常に鍛えられました。その年、私は狭間教授の研究班「梁啓超の研究 その日本を媒介とした西洋近代認識について」にも参加させていただきました。1997年に日本を去る直前に、狭間教授は研究班「中国共産主義と日本」を立ち上げられ、私はこの班に報告を寄せました。

私は、研究班というものの大ファンです。これは、研究者達が大きな研究課題を共有することで、一人ではなしえなかったようなより大きな成果を挙げる卓越した方法だと思います。ただし、一方でこれは班長の裁量によるところが非常に大きい。彼あるいは彼女が、専門家達が次の数年間に追求する計画を 彼等の真の関心の有無に係わらず 決定するからです。

とまれ、人文研の研究班や研究会の成果たる大冊の報告書は、その背後に存する大変な労力の全てをよく示しています。中国・台湾を含む世界のどこにも、人間の精力がかかる真に積極的な目的に斯様に集中せしめられたことはありません。私には、研究者の方々がこの研究班に出席するために定期的に神戸のような遠方からもわざわざやってくる理由がよくわかります。

国際的参加という点に関しては、私には相反する思いがあります。一方では、欧米やアジアの研究者たちが人文研の研究班に参加することは非常に良いことだと思いますが、同時に、これはあくまで私の個人的見解ではありますが、学問的調査に関して同じ水準を共有することが不可欠だと思います。私は、日本人以外の研究者がしばしば水準以下の研究報告をそのままおこなっていると思います。彼らの日本語能力が標準以下であることがその大きな原因であります。要するに、外国人は言語能力を備えた上でのみ、研究班への参加が奨励されるべきであると信じます。

人文研図書室は世界的に有名ですので、ここを利用するために世界中から人がやってきます。しかし所の職員しか書庫に入ることができないので、非常に利用しにくい面もあります。また、ほとんどの書籍は貸出できず、人文研を通じての図書や雑誌のコピーは非常に高くなりますので、あまり便利とは申せません。勿論、蔵書を保護する為になされているということはよく承知しておりますし、客員教授としていささせていただきます間は貸出が可能であったとい

う点は非常に高く評価しています。これは、承知しているとはいえ、難しい問題であると思います。

国際協力に関しては一つ非常に扱いにくい問題があります。これは日本だけでなく欧米でもそうなのですが、中国の研究者を会議等に招聘する際に、しばしばその研究の高い質によるのではなくして、中国での、あるいは中国の学界での地位に拠っているということです。私はこの種の批判を、ハーバード大学・イェール大学・プリンストン大学・カリフォルニア大学バークレー校その他多くの研究機関に対しても持っております。ちょっと考えていたことで、申し上げました。

将来においても、私は人文研の研究会を何度でもお訪ねして参加させていただきたいと願っております。今までに何度かそうさせていただいたことは、私に大きな利益をもたらしてくれました。私は、将来の研究課題は、発足以来、人文研の特質であった3部（訳者注：現在は2部に改組）を横断するものであって欲しいと思いますし、これは既に始まっています。

以上のことが何かの一助となることを願っております。

プリンストン大学高等研究所メロン客員教授
カリフォルニア大学サンタバーバラ校歴史学専攻教授
ジョシュア・A・フォーゲル

張啓雄（中央研究院近代史研究所研究員）

人文研東方部の今後の発展の方針をお尋ねいただき、また「21世紀の東洋学」研究のプログラム一部を下さいましたが、私ごときが論評するのはまことに不相応であります。いささか考えるところを述べてご好意におこたえしますが、卑見をお笑いにならぬよう。

学術環境につきまして、京都は世界でもっとも美しい古都の一つであり、京都大学は長い歴史を有し、伝統を備えた一流大学であります。その中でも人文研東方部の建築は古雅であり、京都大学の古典的な建築群においても、とりわけ典雅の極みを備え、木陰に富み、小川の流れ、鳥語り花香る、幽雅で静謐な「哲学の道」の傍らにそびえ、この人文学のみやこ、書物の薫り高い地に建つ、まさしく碩学を育てるに恰好の場所です。現在、世界の潮流が急激に変

化し、優れた大学が居並ぶ時代において、いかにして人文研東方部が、これまでの厚い基礎の上に、これまでの非凡な業績を突き抜け、独自の特色を備えた学術の重鎮となっていけるかについて、私は次のように考えます。

1. 東洋学の学問体系の確立

私は、真の東洋学とは、東洋に源を有し、東洋から帰納したものであり、そして東洋の伝統概念に適合するものであるべきだと考えております。よって、欧米からもたらされた近代西洋の概念（concept）、模式（model）、研究方法（approach）といったものは、東洋の現象から帰納されたものではなく、また東洋の概念から抽出されたものでもなく、それゆえ東洋の伝統的な世界秩序観を解釈しうるものではありません。視野を広げて欧米の東洋学を研究を理解し、欧米の方法論の精華を吸収することは不可欠ですが、ただし西洋の価値観によって東洋の文化を解釈することは妥当ではありません。よって、独自の特色をもち、それ自体の体系をもつアジア人の東洋学、および東アジアの東洋学の確立を、やはり強化する必要があります。

2. 総合研究の強化

東洋学が対象とする国家や地域は多岐にわたり、踏み込んだ研究をするためには個別的な深い研究をする必要があります。しかしそれによって、木を見て森を見ずという結果になることもしばしば見受けられます。いかにして全体から個体を把握するのか、いかにして個体を全体に結びつけるのか、ということが急務です。またいかにして中心から周縁を見（例えば中国と周辺国家の関係）、周縁と周縁の個別的・総体的な関係を見るか（例えば日本・韓国・琉球の関係、また日本・韓国・琉球・ベトナム・タイ・ミャンマー・モンゴル・チベットの関係）、などは、何れもたいへんに有意義な研究の視角です。その中でも、中国と周辺国家との相互関係は、早急に開拓が必要な総合的な学術領域です。その他、学科の異なる専門家が同じ主題に即して共同する学際的な総合研究は、時代の趨勢です。

3. 実証研究の堅持

日本の歴史研究は、ほとんどすべて実証研究に属しており、言葉には証拠があり、細かく深く、長年持続され蓄積があります。このような研究態度を持続してこそ、貴研究所は過去の厚い基礎をもとに、世界をリードし、国際学術の重鎮となるでしょう。いわゆる「百尺竿頭、さらに一歩

を進む」です。

4. 理論研究の強化

日本の学界は実証研究を重視する余り、時として研究は確かに深くはあるが規模が小さく、極めて細かくはあるが煩瑣である、というきらいがありますが、これらは理論的指導的な研究が欠如していることによるものです。学術理論をうち立てて現象を解釈し、現実の問題を分析し、未来を予測するといったことが、日本の学界に足りない部分であり、解決すべき火急の課題でしょう。例えば、「中華世界の秩序原理」及び、より下位の理論、「名分秩序論」などの領域の開拓といった、このような新しい学術研究領域は創造性をもってはいますが、理論的にはまだ未成熟であり、研究成果は満足のゆくものではなく、ひな形を示すに過ぎません。理論を開拓することは東方学を研究する者たちみな責任であり、貴東方はさきがけをなし、まずは東方学の理論研究において力量を発揮すべきでしょう。

5. 国際的研究の開発

門戸を閉ざした研究の成果には必ずその発展に限度があり、視野の狭い研究は大成が望みがたく、独善的な研究は限度に至れば自己満足するしかなく、何れも碩学を育てる役には立たず、ましてや国際的研究の助けにはなりません。国際化は最良の頭脳の刺激であり、国際化は最良の成果の検証であり、国際化に向かってはじめて国際的な視野を広げることができ、徹底的な国際化を通してこそ国際的な水準の碩学の度量・見識・成果を育てることができます。このようにしてはじめて人文研東方は、日本の一流大学であるのみならず、世界一流の国際的な学術上の地位を占めることができるでしょう。

6. 創造性の追求

ひとつの学術機関の良し悪しは、主にその学術論著の質と量、研究者の風格と度量、研究領域が開拓的であるか否か、研究成果が時代を創造する意義を有しているか否か、によって決まります。さらに国際的研究の見通しと未来を創造しうるか否かにもよります。

一流大学に属してはいても、大局的な視野を欠き、見通しの利かない学術団体は、その学術における指導的な地位はやはりすぐさま他にとって代われ、その学術的な成功もすぐに失われるものです。よって、一流大学を創造する際の務めは、「未来の創造」にあるもので、その先見的な

研究を未来の国際的研究へと発展させ、その先見的な成果を国際学術研究の方向性を導く灯台として高めてこそ、国際学術研究の進歩をたえず導くことが可能となります。

7. 学術的生命の継承

学術的な成果は蓄積を要するものであり、蓄積が長くかつ多ければ、自然に創造を生ずるものです。創造に持続的な蓄積が必要とされる以上、持続的な蓄積は代々受け継がれなくてはなりません。学問は代々受け継がれるものであり、当然、天賦の異才をもつ「頓悟」の学生と、地道な努力を続ける「漸修」の学生の両者を募集し、学問の火を伝えていく必要があります。前者は創造を担い、後者は蓄積を担い、両者が補い合うべきもので、どちらか一方でよいものではありません。学生がなければ、教育によって育てることは難しく、学問を伝承することはなおのこと難しく、蓄積も創造もあり得ません。よって貴東方に学生を募集し、学部、修士課程、博士課程と、系統的に計画し、人選し、育成することを提案いたします。このようにしてこそ、東方部の未永い生命をつくることができると考えます。

その他、自由な学風の堅持、「大学の道」の真の樹立と実践、客観的で公正な審査基準の設置、学術研究に対する行政の不干渉と教育に対する権力の不介入、これまでの研究者が養ってきた碩学の風格の涵養など、何れも一流大学に必須のものでありますが、これらは貴大学においてはすでに重厚な基礎をお持ちのものです。

「21世紀の東方学」研究のプログラムに記されている内容は、極めて具体的なものです。強いていうなら、いくぶん技術的な側面が偏重されるきらいがあり、思想レベルでの主題分析や発展方向の掌握がやや弱いように存じます。前者は具体実行を目指すものであり、後者は発展、持続を目指すものであり、どちらも欠くことはできないものと思われまます。

以上の卑見は、まことに専門家に対して畏れもなく意見するものではありませんが、互いに切磋琢磨することを願い、さらに尊敬する京都大学人文科学研究所東方が、国際的な東方学の第一の重鎮となられますよう期待いたします。

2002年1月1日 張啓雄

ドン・C・プライス（カリフォルニア大学デーヴィス校教授）

昨秋、武漢において人文研の方々とお目にかかれたのは大変嬉しいことでした。また、昨12月13日付けで、貴研究所の業績と連続シンポジウムに対するコメントをお求めくださったことを非常に名誉に思っております。

実のところ、1911年の辛亥革命に関する武漢の学会は、お手紙の中で提起された問題、すなわち貴研究所のスタッフによる海外での研究活動、という点にある程度関連を持っています。1981年にこの種の国際学会が最初に開催された時以来、貴研究所の同学諸兄によって行われ続けてきた学会報告書への貴重な貢献の数々を、中国近代史の諸問題についてなされた他のそれとともに、私はいくらかも数え上げることができます。1987年、湖南における宋教仁についての学会を私は特に好ましく思い出します。その時（当時貴研究所の研究班に参加しておられた）松本英紀教授と私は一緒に、長沙において宋の仲間の一人の縁者にインタビューを行いました。より最近のこととして、私は、貴研究所の貴重な協力のもとでフランスのガルシーにおいて開催されたマリアヌ・バステイド教授主催の学会や、またカリフォルニア大学サンタバーバラ校において開かれ、やはり貴研究所のメンバーによる部分的な支援と貴重な参加とを得た学会に出席するという荣誉に浴しました。私が専門とする領域においては、確実に貴研究所は世界の重要な研究センターの一つであり、また近代中国研究の主要な推進力の一つであるのです。

貴研究所のスタッフによる特定の専攻研究に加え、私は貴研究所により産み出された、二つの特別の研究工具書に対する賞賛を、声を大にして述べたく思います。一つは定期的に刊行される『東洋学文献類目』であり、いま一つは、20数年前に刊行された『民報索引』です。これらの工具書は極めて有用であり、かつ高い水準のもので、私の管見に入る限りでは、ほとんどの出版物は日本語によるもので、それは中国語や英語ほどには私にとって便利なものではありません。しかしながら私はそれらを中国語や英語によって出版をするよう努めることを必ずしも推奨するものではありません。近代中国史を研究する全ての者にとって、日本語を扱えるようになることは義務であると私は考えるからです。そして専攻研究や研究工具書を産み出すことのほうが、それらを他の言語に移し替える作業よりも、あなたがたの時間と労力の遥かに効率的かつ有用な用い方である

と思うのです。

私が貴研究所の図書を利用したのは随分と昔、約40年も前（1964年）のことです。ですから現在の状況について何かを言う資格はないのですが、その当時貴研究所の資料は私にとってこの上なく有用なものであり、また貴研究所が効率的かつ親切に私にそれを使わせてくださったことに本当に感謝している、ということは申し上げておきたいと思えます。

貴研究所の現在および今後の研究教育活動についてですが、私はあなたがたが東方学研究所の大学院をつくる計画をお持ちだと知り、大変喜ばしく思います。貴研究所のウェブ・ページを訪れて確信したのですが、あなたがたは確かに第一級の教育を行いうる教授陣を備えておられます。日本語版のウェブ・ページの方が英語版よりもずっと充実しているようですが、私のコンピュータでは日本語のページのいくつかだけしか正しく表示されませんでした（例えば「Publications 出版物」は駄目でした）。どこに問題があるのか私にはわからないのですが、しかしながら以下の点を申し上げたいと思います。第一に、貴研究所のウェブ・ページは極めて印象的であり、第二に、今日ウェブ・ページはますます重要性を増しており、そして第三に、それらが多言語のソフトウェアとの互換性を確保しつつつくられるならより素晴らしい、ということです。これに関連して私は、メーリング・リストを立ち上げ、利用者があなたがたのウェブ・ページからそれに申し込めるようにすること、そしてウェブ・ページに掲載される、貴所の出版物や活動に関する新しい情報に注意を喚起するために、電子メールを活用することを推奨したいと思います。

最後に研究分野についてですが、私は数多くの開拓すべき価値のある領域を思い浮かべることができます。一つを特に推すなら、それは資源開発と人口の研究です。世界史における工業化の出現という現象は、近年西洋の研究者達の興味をかきたてている特にエキサイティングな領域です。ディヴィッド・ランダース、ジャレド・ダイヤモンド、アンドレ・グンダー・フランク、ウィリアム・オニール、エリック・ジョーンズ、マーク・エルヴィン、ケネス・ボメラント、ロバート・マークス、ピーター・パーデュー、ヴァクラフ・スミルらの研究は全て、方法はそれぞれですが、人口、自然資源（水やエネルギー資源を含む）、環境悪化といった問題を、過去の中国の経済的技術的發展とその将来とを分析する際の要因として扱っています。このような分野は人文学にとってはやや周縁的に思えるかもしれませんが

んが、それらは確かに近代化、経済史、科学技術史の領域に属するものであり、特に森教授や田中淡教授には馴染み深い問題だろうと思われまふ。それらの問題は中国や世界の歴史、および中国と世界の現在と未来にとってこの上なく重要なものであります。素人っぽいやり方ではありますむが、私はそれらについて教え始めています。私の専門的訓練や研究は思想史、文化史に関するものであり、そのような分野に専門家として参入するには遅きに失しているからです。新しい世代の研究者達がそれらに取りかかってくれることを私は心から望んでいます。そして森教授や田中淡教授はそのような過程に貢献するのに、ずっと相応しいでしょう。これは確かに国際的共同研究に適した問題であります。事実、「アジア研究学会 (Association for Asian Studies)」は現在、中国の環境問題に関する研究グループを組織しています。もしこの件に関心をお持ちであれば、私の知る限りで、より詳しい情報を喜んでお送りします。

以上のコメントが少しでもあなたがたのお役に立てば幸いです。回答をお送りするのが遅れましたことをお詫びします。ここ2ヶ月というもの、私のスケジュールは締め切りだらけで、しかもその多くについて締め切りに遅れています。この回答が遅れすぎていなければいいのですが。貴研究所がその光輝ある伝統をますます発展させられんことを心より祈念しています。

2002年2月10日 中国史教授 ドン・C・プライス

宋鎮豪 (中国社会科学院歴史研究所研究員)

京都大学人文科学研究所は国際的に名を知られた学術研究機関でありますむが、長年にわたる研究の方向は中国学を中心として東方学の各領域にも及んでおります。歳月が経ってもかわることなく研鑽する、際だった研究者たちの研究があり、高いレベルの研究成果が次々と現れて尽きることがありません。国際学術界では高い評判と相応の学術的地位を得ています。

私が特に取り上げますのは、人文研の甲骨文・青銅器や中国古典文献学の方面での貢献であります。所蔵の甲骨文は3000片あまりであり、日本における甲骨文収蔵の最大のものになっております。貝塚茂樹教授が当時これらの資料

の整理研究を行い、殷商には王室と「子ト貞」等の異なる占ト集団が存在し、「鴻蒙をうち破る」と言うべきであったことを指摘されましたが、数十年後に殷墟花園庄東地の新出甲骨によって実証されました。林巳奈夫教授は、殷周青銅器の分類・組み合わせ・文様・銘文の書体、中国の古玉、漢代の文物と神々の総合研究について、資料把握の全体性はもちろんのこと、あるいは学説分析の獨創性とその思惟の鋭敏さによって、当然のことながら超一流の学術の大家となられました。また現在活躍めざましい第一線の研究者の成果も少なくありません。田中淡教授は中国科学技術史においては藪内清教授を、中国農業史においては天野元之助教授を継がれた後、中国造園史・建築史・技術史の領域において一連の功績があります。彼は国連の委託を受け、中国山西平遙古城・雲南麗江などの世界文化遺産の評価と保護に対してもたいへん貢献されています。富谷至教授は居延漢簡の研究について、たいへん注目を集めております。新進気鋭の岡村秀典先生が『東方学報』に載せられた「湖北陽湘城研究」は、遺跡の測量に関しては、日本ですでに把握している資料を利用する一方で、中国新発見の考古資料も用いている点で、中国の研究者との協力に成功した好例と言えまふ。人文研附属東洋学文献センター(現「漢字情報研究センター」)が年度ごとに編纂する『東洋学文献類目』は、歴史・地理・社会・経済・政治・法制・宗教・学術思想と教育・科学・文学・芸術・考古学・金石古文書学・民族学・言語文字学・書誌学等々に関する日本・中国・朝鮮・欧米の論著を含み、中国学研究に必備の工具書です。

私は幸いにも1997年に人文研の外国人研究者となったおりに、田中淡教授が主宰する『農書』の研究班と、小南一郎教授が主宰する『周礼』の研究班に参加したことがあります。人文研の学術気風には大きな特色があり、所員の個人研究課題と所内外の多くの研究者の共同研究とが密接に結びついて、異なる学科が互いに総合しており、我々が提唱し、おし広める価値のあるすばらしい方法であると、深く感じました。同時に、日本の研究者は古典文献の理解と精通に対してたいへんな根気を持ち、確かに「旧学を商量すること邃密を加え、新知を涵養すること深沈に転ず」と言うことができ、賞賛に値します。

私が提案いたしますのは、京都大学と人文科学研究所が、課題・領域・学科の三位一体の発展構想を検討する際に、将来性のあるもの、あるいは注目されているものや難しいものといった、重大な課題から切り込み、学術領域のレベ

ルアップを促進し、学科の未来発展の方向をしっかりとらえてはどうかということでもあります。まことに「21世紀の東方学」趣意書において、中国の世界における影響力と重要性が強まっていることに鑑みて、日本人はその現在と未来の様相を確実に把握するよう努めなければならず、同時に中国文化の歴史と伝統を深く掘りさげて理解しなければならない、と指摘されたとおりなのです。後者、すなわち中国文化の歴史と伝統の理解については、人文研は自らの強みを持っており、それを弱めてはなりません、いっぽうで中国学界の発展の趨勢にも関心を向けなければなりません。とりわけ新世紀到来の前後には、出土文字資料が大いに豊富となり、地下考古は絶えず人々の視野を刷新し、新たな課題を解決せねばならなくなり、伝統価値の観念もまた変革しております。中国社会科学院の課題設定には、院の重大項目、各研究所の重点課題と個人が自ら選んだ課題等々の区分があります。人文研は国際協力、とりわけ中国の最高学術研究機関と広範な学術交流と人員交際を強化しなければなりません。傍観するよりも自ら行うほうがよいですし、受動から能動へと変えれば、世界化した研究体制の構築に利があるでしょう。

私は人文研が世界に向けてコンピュータの学術資料データと情報検索システムを築き上げるべきであり、コンピュータ・ネットワーク情報の手段等はすべて強力に強化しなければならないと考えます。

以上もし妥当でないところがあれば、謹んでご教示をお願いいたします。

宋鎮豪

トーマス・A・メッツガー（スタンフォード大学
フーヴァー研究所教授）

貴研究所のような著名な中国学の研究所が、新しい世紀にむけていかに発展して行くべきか、ということについての意見を求めくださったことは、私にとって大きな名誉です。外部に意見を求められるというあなたがたの公開性と批判的自覚性とを賞賛する一方で、私は、貴研究所が既にお考えのこと以外に、自分がなにかの示唆を行いうるかどうか、真剣に疑問に思ってもいます。しかしながら意

見を求められたからには、あなたがたご自身の出される結論に対して何かの反響を残すかもしれない、いくつかのことを述べてみようと思います。

第一に、極めて明瞭なことは、日本の中国学の偉大なる伝統を継続することこそが、あなたがたの最大のチャレンジであるということです。日本の中国学は、残念ながらまだ私が十分に勉強し尽くせていない、大いなる豊かさを内にもつ大海のごときものです。しかしながら、私の偉大な師である楊聯陞教授が常に強調していたように、D・C・トゥィチェットの如き研究者の研究が依拠するような、唐代、宋代に関する日本人の卓越した研究について学べば学ぶほど、日本の中国学の奥深さは私にとって明らかとなってきます。また、マーク・エルヴィンやピーター・J・ゴラスによる周藤吉之の如き学者の研究の利用にも私は啓発されています。斯波義信の寧波に関する壮大なる研究は英語で出版され、私に深い感銘を与えました。明代の商業について調べている際、私は藤井宏の諸論考に大いなる感銘を受けました。明代の塩の専売に関する彼の論考、ならびに、帝政中国後期の商人のエトスに関する余英時の後期の論考の基盤ともなった、新安商人に関する彼の四部にわたる論文を読んでからは、私にとって彼はヒーローとなりました。また佐伯富の清代の塩の専売に関する著書も私にとってきわめて有用でありましたし、『史学雑誌』を読み、『アジア歴史辞典』を調べ、そしてもちろんのこと『諸橋大漢和辞典』をひくことで、私は多くのことを学びました。そしてまた私は、仁井田陞、加藤繁、内藤虎次郎、島田虔次の如き碩学達の、底知れぬほどの学識に多大なる感銘を受けたのです。

第二点は方法論にかかわることです。私の見る限り、日本の中国学の強みは、多くの場合において中国の偉大な研究者と同等あるいはそれに近いほどの中国文献への精通に立脚しており、それは同時に一次資料の徹底的かつ正確な利用に関する、ある種ランゲ学派的な強調をも伴ったものでもあります。かくして日本の研究者達は『宋会要』や『明実録』のような資料を博搜し、その中に散在する極めて有意義な問題　とりわけ経済に関わるそれ　への言及を見つけたすことにおいて卓越したのです。この類の学識は、中国の歴史を研究する際のまさに基礎をなすものです。日本の研究者達は、この種類の学識においてしばしば他国の全ての研究者達を凌駕してきました。この日本独自の伝統に関しては、ただ一点のみを推奨するだけです。どうかそれを継続してください。もしそれを失ったなら、世

界中の中国研究は大きな痛手を被るでしょう。

しかしながら私は、中国に関するいくつかの重要な研究において、自分が日本人の研究にそれほど大きくは依拠していない、ということを確認しなければなりません。おそらくそれは、日本の中国学に関する私の無知、あるいは研究に費やせる時間が限られているために他の著作、とくに中国の一次資料と社会科学および精神史についてのそれを優先せねばならないことのゆえなのでしょう。しかし理由がなんであれ、私は、清代の官僚機構の組織構造、その官僚機構と社会との関係、この官僚機構が結びついている文化や精神パターン、これらの伝統的精神パターンと近代中国における政治的、哲学的思考との間の継続と断絶、西洋の認識論的思潮（私が好んで「偉大なる西洋近代の認識論的革命」と呼ぶものであり、中国はそれを不可知論として拒絶した）にこの近代中国の精神的伝統が反応したやり方、そしてこのような中国と西洋の認識論的視点の競合を哲学的に評価するという問題、といったような主題を研究するとき、日本の研究にはほとんど依拠してこなかったのです。このような主題を研究しようとする際に私が目を向けたのは、日本の中国学ではなく、とりわけジョン・K・フェアバンクによって押し進められた学際的アプローチ、もう一人の私の師であるロバート・N・ベラーによって推進されたウェーバー学派的、反マルクス主義的社会学の伝統、精神史に対する「ディスカール」的アプローチ、唐君毅やその他の新儒学者の儒学的伝統に対する洞察、そして鄭家棟ら北京学派や、郭齊勇ら武漢学派により現在展開されつつある新儒学派に対する新たな批判、であったのです。私にとって同じく重要だったのは、ウィリアム・セオドア・ド＝バリーの初期の著作であります。彼もまた新儒学派に影響された人物です。要するに、私は日本の研究にあまり多くは見いだせないような、方法論的資源を必要としたのでした。

とりわけ私にとって中心的課題は、近代中国の政治思想や政治的發展と、中国の伝統の間の継続と断絶の問題でした。私は近代中国の精神の中に、この種の多大なる継続を看取しています。そのような継続性は、私の学生である黄克武の、嚴復と梁啓超に関する研究の中で探求されています。しかしながら、日本の研究者の中には継続と断絶の混淆を分析することではなく、近代中国の精神世界に日本の思想を輸入したことによって生じた断絶を強調することの方に興味をもつ人もいます。確かにそのような輸入は極めて重要なものでした。最近清華大学の劉桂生教授は、近代

中国における儒教文化の後進性の強調は、部分的には日本に留学した中国人学生達が学んだ、儒教文化に対する日本の態度に由来するのだと指摘しています。多くの日本人が儒教を後進的だと考え、多くの日本に留学した中国人学生は日本の見方が正しいのだと確信したのです。しかし中国の思想に対する日本の影響がどれほど大きなものだったとしても、今日多くの研究者は、近代中国において、ある種の伝統中国の思考様式が存続していたことを強調しています。それゆえ重要なのは継続と断絶の混淆なのである、と私には思えるのです。

この点については、一つのパラドクスがあります。最近、貴研究所からのご親切な招待を受けたあと、私は東京と京都を一週間ほど訪ね歩きました。私は、東京の普通の街中の文化をも含めた日本の文化の質の高さに驚きました。そして日本が今日の世界でも最も文明化された社会なのかもしれない、と信じるようになりました。それは皮相的な見方だという人もいるかもしれませんが。しかし、日本人が近代中国と近代日本を比較し、日本が中国よりも遙かにうまく西洋の衝撃に対処し得たという考えに単純に焦点をあてるということが、なぜ起き得るのかを理解するのは容易です。それゆえ、そのような人が近代中国の歴史を研究する際に、日本が中国に比していかに早く、またより効率的に、西洋の価値ある考えを利用し、そのうえで中国の研究者がそれを理解するのを手助けし得たか、という点に興味をもつのは自然なことでしょう。この日本の見方は理解しうるものではありませんが、しかしながら、それは上述のような継続と断絶の混淆に対する、均衡のとれた慎重な研究へとそのままむすびつくものではありません。

私が仕上げつつある著書の中で強調しようとしている如く、より広く、今日の学界全体において、精神史研究の方法論に関する大きな論争があります。思想の歴史をどのように記述するかという問題です。この点に関して私自身は、私が目睹した日本人の研究だけでなく、中国、香港、台湾、そして西洋の代表的研究者達のそれとも意見を異にしています。私の考えでは、歴史的思考をどのように記述し評価するかに関わるこの国際的論争は、近代の中国学が直面している最も大きな問題の一つであります。とりわけ、多くの研究者に拠れば文化は政治的發展にかくも大きな影響を与え、思想風潮は文化の進歩に大いに影響するわけですから。

それゆえ、日本の研究者達が、中国研究の再構築をいかに行うかというグローバルな問題に直面する時、その主要

な目標は極めて明瞭であると私には思われます。第一に日本の中国学のもつ力を保持すること。第二に世界の他の中国学界との間で、批判的かつ厳選された交流を最大限に行うこと。後者の目標については、二つの大きな問題があると言えるでしょう。言語と方法論です。周知のごとく中国について研究し、また他の中国研究者と交流するために必要な全ての言語を修得するというのは、あり得ないとまでは言えませんが稀なことではあります。また多言語に通じた人が常に最も洞察に満ちた研究者であるわけでもありません（胡適の英語は唐君毅のそれよりもずっと上手ですが、後者は中国と西洋の両方の哲学を遥かに深く理解しています）。

中国学における国際的な対話の成否は、日本人の言語能力だけではなく、日本人研究者の著作に回答できるほどに外国人研究者が日本語に熟達することにもかかっているのです。発表者が原稿を読み上げ、それから二、三の儀礼的応答を交わすような国際学会は何の役にもたちません。日本人研究者の著作を深く読み込むことによってのみ、外国人研究者は日本の研究に対して意味のある意見を提出しうるので。しかし、たとえば中国、西洋、日本の資料に通暁し、同時にそれらの一次資料に関する中国人の研究をも把握しながら、中国の精神史を研究する学生を見いだすのは非常に困難でしょう。

おそらく我々は、a) 中国の歴史について一般的なレベルでしっかりと理解を有し、b) その中のある重要な部分を専攻し、c) 中国学における少なくとも二つの主要な伝統、たとえば日本と中国、あるいは日本とアメリカ（例外はあるものの、私はアメリカの中国学の伝統は、アメリカ人以外の研究者による貢献をも含めて、現在ではヨーロッパのそれよりもずっと重要だと信じています）、についての深い理解をもつ、そんな中国研究者を育てることを目指すべきなのでしょう。

方法論に関して、私はレストランの経営者に対して行うのと同じアドバイスをなすのみです。良い味覚を用いてメニューをつくりなさい、と。例えば、中国社会の発展を分析するためにマルクス主義理論を用いた日本人研究者達は、ウェーバー学派の伝統によって示唆された分析的可能性を評価する十分な見識を持っていませんでした。私は今日の日本の研究者達が、現在のアメリカの研究を蝕んでいる量的、合理的選択によるアプローチにますます傾いているのではないかと危惧しています。私はまた、彼らが無批判に現代西洋の哲学学派を受け入れているのではない

かとも危惧しているのです。

以上の拙劣なコメントが冗長すぎぬことを願っています。敬意と、そして今月初めの素晴らしい訪問への感謝とをこめて。

上級研究員 トーマス・A・メッツガー

章開元（華中師範大学中国近代史研究所教授）

お手紙拝見いたしました。人文研東方学研究部が、大規模改革の長期計画をたてられたとのこと、まことに喜ばしく存じます。特に、東方学大学院の創設の計画は、私のように古くから京大と関わりのある者にとって、興奮すら覚えるできごとです。京都大学には、これまで以上の国際化・外部とのさらなる学術交流・若い傑出した人材の育成を望みます。

新しい時代に向けての新機軸を打ち出されているように拝察しておりますが、これには諸手をあげて賛同いたします。私は以前より、歴史学者は過去・現在・未来をつなぐ橋梁となるよう自覚的に努めなければならないと考えてきました。我々は歴史を研究するのみならず、歴史の創造に積極的に参加していかなければならないのです。

漢字情報学の研究は、漢字の整合のために差し迫って行わねばならない仕事で、言語文字学自身のみならず、文化交流においても極めて重要な意味をもっています。この仕事が漢字を使用している各地域からの注目を集めることは間違いありません。本学の言語学部も、この方面の仕事をとて重視しています。現在の中国教育部語言文字信息管理司司長の李宇明氏（この人は華中師範大学の著名な学者邢福義先生のもとで博士号を取得しました）も、貴学との連携を強化してゆきたい考えです。

現代中国研究や社会学・人類学・歴史学などのフィールドワークによる研究を強化していくことも、我が国の多くの高等教育機関（本学および本研究所も含まれます。例えば、商業会議所・市鎮・県以下のレベルの政権構造と改革の研究、キリスト教研究などを行っています）が今現在従事している仕事です。今後は、必ずや相互交流・相互学習を通じて、ともに新世紀の東方学の発展に寄与すべく尽力していくことになるでしょう。

もちろん京大人文研の学術伝統を無視することはできません。内藤湖南・吉川幸次郎から小野川秀美・島田虔次にいたる諸先生・先輩方に連綿と受け継がれてきた京都学派の学問は貴重な文化遺産であり、日本だけでなく、アジアひいては世界全体に属するものと言えるでしょう。改革が伝統を受け継ぐ形で推進されることを心より望みます。伝統と改革は互いに補完しあうべきであり、どちらか一方を無視することは許されません。このようにしてこそ、京都学派は若々しいエネルギーを持続していくことができると思うのです。

取り急ぎ乱筆乱文にて失礼いたします。

章開沉

黄留珠（西北大学歴史系教授）

人文科学研究所の「印象」と「要望」

京都大学は日本における中国学発祥の地であり、ここにかつて集まった日本中国学の碩学達はのちにかの「京都学派」を成しました。「最新考古資料に基礎をおいた実証的な歴史研究」という京都学派の学問的伝統は前世紀の初頭、内藤湖南博士が京都帝国大学にて「東洋史学」第一講座を主催された時に始まるものですが、先般京都大学人文科学研究所主催で行われました「21世紀の東方学」シンポジウムは、この伝統が京都大学にて堅持されてきたことを証明するものであります。

周知のように、中国歴史学の泰斗、王国維の「二重証拠法」は日本亡命中に確立されたものですが、それはまさしく、百万遍のこの地に起源をもつのであります。今日「羅王学」の創始者として知られる羅振玉・王国維と、京都帝国大学の内藤湖南・狩野直喜教授等との学術交流とその上に築かれた友情は、まこと世界学術史上の佳話と呼ぶべきものであります。もし内藤湖南の「王亥」がなければ有名な王国維の名論「殷卜辞中所見先公先王考」もあり得なかったであらうでしょう。また内藤博士は王国維のこの論文を読んで大変感服し、直ちにその大意を「續王亥」としてまとめ、日本の学界に紹介したのであります。こうした学術交流がもたらす相互の利益を考えると、まこと学問は天

下の公器であり、研究は常に国内外の研究者間の協力を要するものであることが理解されましょう。

私は幸いにも2001年春に京都大学人文科学研究所を訪れ、井波陵一・富谷至両教授が主宰されている「三国期出土文字資料研究」班の研究会に参加させていただき、実証主義に基礎を置く京都学派の研究体制を間近で実見する機会を得ることができました。以下にその際に得た印象を記していきたいと思います。

1. 会談形式による研究会

日本の会談形式による研究会の運営についてはこれまでも何度か耳にしてきましたが、このたびの滞在でこれを実際に経験し、得るところが非常に大でありました。研究所の掲示板に貼られた研究会日程案内をみても、同様の運営方式をとる研究班は他にも多数あり、当地では普遍的な研究会のあり方と見なされていることがうかがわれます。こうした班を単位とした研究会運営では、多くの構成メンバーの力量を最大限に引き出すことが可能であり、他の研究機関も大いに参考にすべきと思われました。

2. 優れた研究テーマの設定

三国期の碑石文字については、出土した資料から窺えるものは量的にはさほど多くなく、かわりに各種の金石資料に散見されます。近年中国ではこうした資料の整理作業に従事する研究者が出てきているものの、依然としてその規模は小さく、また多方面からのアプローチを要請されるために、深く立ち入った研究は少ないというのが現状です。また出土した簡牘文字資料の中で最大級のものといえば走馬楼呉簡ということになりますが、これについても整理・研究はようやくその端緒についたばかりです。こうした状況下で井波・富谷両教授が三国期出土文字を研究テーマとして選択していることは、きわめて優れた展望をもって研究に取り組んでおられることを証するものといえます。またかかる研究テーマ設定の的確さ、鋭さは、殷墟甲骨文字や敦煌藏経研究を成し遂げた京都学派第一世代のそれに決して引けを取るものではありません。

3. ゆったりした研究環境

井波・富谷両教授の研究班は毎週1回、2時間のペースで5年間計画で運営されていましたが、このように長期間にわたり多くの研究者を集め、また比較的潤沢な研究費でひとつのテーマを追究するわけですから、その成果は自然

と性急なものとはならず、十分に推敲・検討を経た優れた内容のものとするのが可能であります。こうしたゆたかりとした研究環境は、高レベルの研究成果を維持するための必須条件のひとつと考えられます。

4．豊富な研究資料

研究会においては、毎回ひとつの石碑を対象として取り上げるたびに、可能な限り拓本や写真、あるいはコピーが各人に資料として配付され、討論に供されています。また研究会の行われる会議室の四方の壁には工具書をはじめ、各種の関連資料が所狭しと並べられ、討論中も必要な資料を各人が閲覧できるような環境になっています。とりわけ研究所で編纂している『東洋学文献類目』の収載資料は大変行き届いており、驚かされます。私事ですが、私が1979年に『人文雑誌』において発表した小論は中国の目録類を検索しても出てこないのに、この『文献類目』ではいとも簡単に探し当てることができるのです。こうした些細なことからも、この目録がいかに網羅的に資料を収載しているかがうかがわれるのでありまして、こうした地道な資料収集が、優れた研究成果を生む必須の前提となっているのです。

5．実証的な研究方法

研究班は京都学派の実証主義的な伝統を堅持しており、会談に際しては出土文字一語一句に対して字の同定を行い、解釈を加えていきます。毎回検討会ではメインとなる発表を受けて、他の方がこれを補うべく討論を行うわけですが、こうした方法を通じ、参加者全員の能力を結集させることで得られる利益は大きなもので、研究会の成果として得られた結論が100パーセント正しいとは言わないまでも、問題となるような点はごく僅かに抑えることができるわけです。また資料に対するこうした綿密な検討が以後の一切の研究の礎となるのです。

以上の5点のほかにも、人文研では外国人研究者の受入体制が整っていることも私たちの印象に残りました。このたびの訪問も富谷教授が日本学術振興会に申請して下さったことで実現できたわけです。人文研には私達以外にも学術振興会からの招請により来日した研究者達が多数いましたが、彼らもみな同様の感想を持っていました。

さらに付け加えるなら、人文研における図書の閲覧システム・サービスも出色のものといえます。強い責任感とプロ意識を持った司書、また優れた図書管理システムの存在

は、借用・閲覧に大変良好な環境を提供しているといえましょう。

私は京大文学部図書館でも図書の閲覧をしたことがありますが、ここも同様に管理・サービスがともに非常に行き届いておりました。特に書庫に入って図書の検索ができることは利用者にとって大変便利でした。

このたびの訪問は時間的には短いもので、駆足でしか見ることのできなかった部分が多分にあります。従ってここで指摘できる内容も本当に強く印象に残ったことのみに限られ、「評価」と呼ぶにはほど遠いものでしょう。しかし、人文研の今後の研究事業についてこの場を借り、以下の数点を将来へ向けての「希望」として指摘したいと思います。

まず、中国学を主要研究対象とし、これまでも最新考古資料に基づく実証的な研究を行ってきた京都大学人文研には、今後とも中国の学界との協力体制を強化していただきたいと考えています。とりわけ、中国文物大省との共同研究はその中でも重要なものとなるでしょう。私がおります陝西省は中国の中でも最も重要な文物大省に属していますが、この中にある秦始皇帝陵ひとつとっても、その考古学調査はあと50年かけても終わるかどうかわからないほどの規模を有し、世界を驚かすような新発見をもたらす可能性を秘めています。つまりここに国際共同研究のもたらすメリットが潜んでいるのです。私が奉職しております西北大学は、中国西北地区ではもっとも古い歴史をもつ総合大学であり、歴史学・考古学の分野では特に優秀な人材を輩出しています。著名な考古学者で秦漢史の専門家である陳直先生もその主要メンバーの一人ですが、彼もまた京都学派同様、考古資料を用いた実証的研究を得意とする研究者です。1980年にはわが西北大学と京都大学の間で学術交流が行われ、富谷教授は京都大学より招聘外国人研究者として西北大学に派遣され、また西北大学からは名誉校長張豈之教授も京都大学に赴き講義を行ったのであります。残念なことにごこうした学術交流はその後一時中断しましたが、このたびの私達の訪問をきっかけにいたしましてまた往年の交流の再開を切に祈る次第であります。また両校の学術交流をさらに広く推し進めて、21世紀の栄えある中国学・東方学の創造へ向けてともに貢献していきたいと思うのであります。

二番目の「希望」であります。日中間の学術情報の交流、交換をさらに強化していく必要があるのではないかと思います。このたびの滞在で人文研と文学部の図書館を拝見したかぎりでは、大陸で出版された最新の学術刊行物の

所蔵量はまだまだ少ないように思われます。とりわけ、大陸の各高等院校で刊行された学術刊行物に関しては基本的に全く入っていません。現在大陸ではこうした刊行物は実に数多く、我が西北大学が刊行している『西北大学史学叢刊』はこれまでに4輯を発行しておりますが、高レベルの論文も少なくありません。従いましてこれらの刊行物も国際的な学術交流に供すべき資料といえます。このほかにも中国において、は各種の研究会がそれぞれに論文集を発刊することがありますので、こうした刊行物にも留意すれば、『東洋学文献類目』は間違いなく完備されたものとなりましょう。

第三は成果の公表方法に関するものですが、今後人文研での研究成果を中国語で発表していくシステムを作ることはいかなるでしょうか。個人的な意見ですが、中国学がメインとなっている以上、その成果を中国語で発表していくこともまた必要であり、こうすることによって、中国大陸のみならず台湾をも含めた広い範囲で研究者間の学術交流がより促進されるのではないかと思います。

黄留珠

オリヴァー・ムーア（ライデン大学中国学研究所講師）

2001年12月13日付けのお手紙をありがとうございました。著名な貴研究所について意見を求められたこと、たいへん嬉しく思います。以下に記しますことがら貴所のプログラム「21世紀の東方学」に対して聊かなりとも役立てば幸いです。

京都大学人文科学研究所は、アジアのあらゆる地域における古代・近代社会にかかわる人文学各分野にとって、日本第一の研究センターとして、ヨーロッパの研究者たちの間でひろく知られています。私が思いますに、日本より外においては、貴研究所の名声はアジア（とりわけ中国）についての関心の上に成り立っていますが、しかし私は、貴所の研究者の中にはたとえばヨーロッパの社会や文化についての問題を研究する方々もいらっしゃることはよく存じ上げています。貴所の研究者たちは、第一級の諸出版物（主に日本語で）を出しておられますが、それらは早い時代の中国を研究する者であればなんびとも無視できぬもの

ばかりです。それらの業績は、資料を徹底して科学的に使用する点と、理論的側面および現実とのかかわりに目配りしながら研究されている点で高い評価を得ています。研究所から発行された学術的業績は、いずれも高い信頼性を有するものとして受け入れられています。

私が研究所にお世話になったのは2000年のことですが、そのころ私は1ヶ月間の研究を行ないつつ『ケンブリッジ中国史、唐、第2巻』に論文を書くことになっていました。このとき私は研究所にいた何人かの外国人研究者の一人でありましたが、われわれの一人一人がみな、研究所のきわめて友好的な雰囲気と業務の特色であるところの専門的水準の高さに感服した次第です。私の場合はさらに言えば、研究所および班員の日本人研究者のみなさんが研究班の場において資料とその解釈とをやりとりする、その熱意と技術のすばらしさに感銘を受けました。そうした研究班がつつちう優れた環境というのは、他の所でも同じようにできるものではありません。広い見識に立ち、計画はよく練られ、教育的であり、しかもおもしろい、そうした「生き生きとした」共同研究、それこそが、なぜ研究所のうみだす研究と出版物とがあれほどまでに高品質であるかの理由をものがたっています。そうした研究所の共同研究の良き実例として、スウェーデン国立民族博物館所蔵のスウェン・ヘディン考古学コレクションにかんする出版物があります。装幀も美しいこの本が、碑文研究の記念碑的存在であると同時に、国際協力がもたらす成果がどれほど豊かなものであるかの証明であることは論ずるまでもありません。ただ、ひとつ付け加えなければならないことがあります。それは、私が注目を促すまで、イェール大学の中央アジア考古学を専門とする同僚たちは本の出版を知らなかったという事実です。おそらく貴研究所の研究ないし出版の最新情報は思ったほど広まらないということがあるのででしょう。

私のばあい、研究所の出版物情報は日本語の情報源を紹介して最新のものを得るよういつも気にかけていますが、研究所のすべての出版物が英語による情報（学術誌やインターネットなど）として報告されているかどうかは存じ上げません。京都大学のウェブ・サイトではそうした情報を見いだせませんでした。あえて申し上げますと、国際的な学術のレベルで研究所の学術成果を絶えず知らしめるために、可能なあらゆる方法を駆使するのも重要なことではないでしょうか。

研究所の図書は非常にすばらしいものです。2000年に京都に滞在した時には図書館の開館時間にやや制限があった

ことをひどく恨めしく思ったものです（ただし、ライデンのおおくの図書館の開館時間もまったく同程度に限られているということを、是非とも同時に申し上げておかねばなりません）。

私の専門領域は中国美術史と中国中世の法制史ですから、当然のこととして、私は貴研究所の研究者たちのおこなう研究と今後も交流をもちつづけることは勿論ですが、将来も貴研究所がひきつづいて、日本・中国・西洋の研究者間の協力体制のため、物心両面の基盤を供給し続けられることを願っています。研究所が日本人の精神生活を反映することは勿論きわめて重要ですが、それ以外に、中国にいる中国人研究者たちの見解や業績についての情報を貴研究所が提供可能になれば、学術的価値はきわめて大きいでしょう。

東方学の大学院を設立するのは素晴らしい考えであると思います。その名前を東方（oriental）とするより、むしろ、アジア学（Asian Studies）大学院と呼称するのを考慮してみたいかがでしょうか。その方が現在の潮流とうまく合致するように思います。大学院は日本内外の学術団体とのさらなる関係を研究所にもたらすでしょうし、現在および将来になすべき研究は、よりいっそう学術領域と教育の発展をたかめる方向で収斂することになるでしょう。ライデン大学中国学研究所は間違いなく今後この大学院構想の進展につよい興味をもつでしょうし、私もわが同僚たちも、そうした大学院構想によって、前近代ならびに現代のアジアの諸相を大学院で研究したいと思っているオランダないしヨーロッパの学生たちを正規に受け入れるための方法がひろがるかどうか、ぜひとも知りたいところです。

研究所の皆様が連続シンポジウムを成功裏に継続し、また研究所のためにとりおこなわれる他の計画がいずれも滞りなく進みます様に心よりお祈り申し上げます。

ライデン大学中国学研究所中国美術史講師
オリヴァー・ムーア（博士）

湯志鈞（上海社会科学院歴史研究所研究員）

継往開来，温故知新

日本の東方学研究には長い伝統があります。京都大学人文科学研究所は「共同研究」という方法によって、いろいろな方向からの探求をおこなっておられます。中国学を主としながら東方学のさまざまな領域において多くの成果をあげ、学術の発展を促すはたらきもしてこられました。私が知っている中国近代史の範囲で申しまして、辛亥革命・五四運動・梁啓超などに関する共同研究があり、『五四運動の研究』『共同研究 梁啓超 西洋近代思想受容と明治日本』などの質の高い論文集が出版されているだけでなく、『民報索引』『日本新聞五四報道資料集成』などの資料集の編集もなされています。共同研究であるため、智慧を出し合うこと・切磋琢磨することが可能となり、また長期にわたる研究の蓄積であるため、内容はよく吟味され、叙述は格調高いものになるのです。このような共同研究の成果は、近代史研究に大きな影響を及ぼしてきました。同時に、京都大学人文科学研究所の謹厳な学風もまた一貫して称賛されております。

すでに21世紀になった現在、新しい潮流にどのように対応していくか、どのように前人の事績を受け継ぎ発展させていくか、どのように中国文化の歴史と伝統を理解していくかということは、沈思黙考するに値する問題に違いありません。

京都大学人文科学研究所は、このような問題にたいして、すでに準備を始めておられ、大学院の創設を予定しておられるとのこと。もともとの基礎の上に今後の方向づけをしていく、つまり温故知新を行ってゆくならば、新しい大学院構想はかならず成功するものと信じております。

発展は継承から生まれます。基礎がない研究は、根がない木のようなもので大成が望めません。京都大学人文科学研究所には共同研究による長期間の蓄積があります。これは根のある木に例えられましょう。このような研究の蓄積を継承することにより、自ずと新しい発展をされることでしょう。

しかし、発展を強調しすぎるあまりに継承を無視することはできません。優良な伝統は、長年にわたる多くの人々の苦闘と実践によって形成されたもので、遠ざけたり捨て去ったりすることは許されません。伝統に固執するあまりに発展を拒否することはできませんが、同時に、新しい研

究に酔いしれて伝統を無視することもあってはなりません。例えば、漢字の構造研究には古代中国語の基礎知識が必要です。現代中国研究についていえば、やはり古代・近代に源があります。フィールド考古学では、古代の文物や典章制度・天文暦法・歴史地理などに関する知識がより重要です。大学院の学生は、専門のトレーニングを受けたり、実際に当該方面での実践を積んだりすることでしょう。しかし、中国は文明の発祥地であり、長い歴史と燦爛たる文化をもってあります。考古学上の発見や文献資料の多さは世界でも類を見ないものです。このような広大な資料に相対して、どのようにその正否や真偽を見分けるかということは一朝一夕に会得できるものではありません。大学院は、読書会や共同研究などの伝統を受け継ぐ必要があるように私には思われます。そうすることによって、学問の基礎固めができ、影響力のある発言ができるようになるからです。温故は知新を助け、知新は温故によるところが大きいのです。「継往開来、温故知新」によって新たな挑戦をさせていただきたいものです。

以上のようなことは、京都大学人文科学研究所では、すでに熟慮されていることでしょう。貴学を思う心の深さから余計なことを書かせていただきました。

湯志鈞

楊天石（中国社会科学院近代史研究所研究員）

京都大学人文科学研究所の東方学研究に対する 評価と展望

京都大学人文科学研究所は日本さらには世界の東方学研究の重鎮です。長い歴史をもち、多数の優秀な専門家を抱え、歴史・文学・哲学・考古学などの多くの領域においていずれも極めて大きな成果をあげ、著名な京都学派の傑出した代表であります。私が思いますに、人文科学研究所にはいくつかの重要な特色があります。

1．謹厳で堅実な学風。人文科学研究所の専門家達は、資料と考証を重視し、空論を尊ばず、流行している理論を追い求めることなく、長期間もっぱら実証研究に集中します。

発表された成果は謹厳かつ堅実で深みがあって、時間の検証に耐えうるもので、非常に高い科学的水準を保っています。

2．共同研究。人文科学研究所は経常的に各種のテーマの研究班を組織しています。これは一つの非常に優れた方式です。この方式は、各研究者の専門と興味を十分に発揮することが可能です。また一群の専門を同じくする専門家が極力団結し、心を一にして協力し、互いに補い合い、切磋琢磨し、衆人の意見を集めてより大きな成果を収め、東方学の中のいくつかの比較的大きくて困難な問題を共同で解決することが可能です。

3．資料を共に享受すること。人文科学研究所およびそれに所属する研究班の研究者達は、広範かつ十分に資料を収集するだけでなく、この資料を抱え込まないで、よく同僚の使用に供して、無私で高尚な精神・品格を表しています。

私と人文科学研究所の研究者との間には多年にわたるつきあいとよしみがあります。2001年7月より、また幸いにも梁啓超研究班の研究者達と半年間共同で仕事をしました。この研究班は中国語版『梁啓超年譜長編』を日本語に翻訳することを任務とし、さらに関係する史実・人物・法律制度についての注釈も進めています。この事業はすでに8年を経過し、草稿は基本的に完成していますが、おそらくさらに1、2年作業を進めてからはじめて出版されるでしょう。共同の作業の中で、研究班の研究者の中国語文献に対する理解のレベル、考証・訓詁能力や、いささかもおろそかにしない精神に、私は深く感服いたしました。私が台北の中央研究院の研究者とこの事業について話したとき、彼らも京都の研究者のこのような精神に敬意を表していました。

私は、京都大学人文科学研究所の今後の改革の中で、従来の精神と特色を保持し、その貴重な遺産を代々伝えていくことを希望します。東洋の実情についての研究を重視すると同時に、なおも東洋の歴史と文化の研究を非常に重視し、同時に不断に国際的な学術交流を強化・拡大し、国際東方学研究の中でさらに大きく、重要な機能を発揮されることを期待します。

楊天石

アンデルス・カールソン（ロンドン大学アジア・アフリカ学部講師）

回答が遅れましたこと、また内容が随分と一般論となつてしまい、かつまた限定されたものであることをまずお詫びいたします。これは、不幸にも現在私が SOAS で大量の仕事を抱えていること、および私の貴研究所との関わりが未だ日浅いものであることのゆえであります。しかしながら、貴研究所が私に与えて下さったご助力への感謝のしるしとしてこれをお送りいたします。少しでもお役に立てればと希望しています。

1. 過去の実績

研究内容 私は、貴研究所の研究業績に関してなにがしかの評価を行い得るような立場に自分がいるとはとても思えないのですが、しかしながら全体として研究の水準は極めて高いと感じています。一般に、東アジアの人文的研究、特に歴史学に関する私の印象は、テキスト/資料分析と理論的考察の間のある種のアンバランスです。多くの研究が、テキスト/資料分析の健全なる基盤の上に成り立っていますが、より広汎な理論的コンテキストを欠くがゆえに、しばしばその主題や結論をより広い研究の中に関連づけそこなっています。この点については、「将来への希望と期待」の箇所、人文科学と社会科学の関係について扱う時にまた立ち戻ることにしてしまおう。

国際共同研究の状況 二度にわたり、外国人研究者として京都大学の図書館で資料を調べることができた限りでは、私の経験は素晴らしいものでした。私は貴研究所から十全なる助力を得、これといった困難を経験せずにすみました。

図書館サービスについて 上で述べましたように、私の経験した限りでは素晴らしいものです。スタッフは非常に親切で、図書館のシステムも効率的でした。もし改めてコメントするとすれば、非常に細かなことですが次のようなことでしょうか。京都大学図書館は東アジアに関する多くの重要な研究や資料を所蔵しています。それゆえ、私のようにきわめて基礎的な日本語の知識しか持たないような研究者も、それらを閲覧するために訪れます。「国際共同研究」の項で述べるべきかも知れませんが、もし図書館の検索システムが資料自体の言語（私の場合は朝鮮語ですが）によるそれをも備えていたら、このような者達は大いに助かるでしょう。全体として朝鮮に関する資料は散在しているように見え、これはもう少し調整されるべきかもしれま

せん。しかしそれは朝鮮研究が現在のところまだ（そう希望しますが）、貴研究所において行われている東洋研究の中でそれほど重要な役割を果たしていないことによるのだということは私は十分に理解しております。京都大学図書館の重要な特色は、極めて多量のユニークかつ重要な資料が異なるコレクションの中に含まれていることです。国際共同研究を推進するためにも、これらの資料がウェブ上にリスト化され提示されれば非常に有用であると思います。

2. 将来への希望と期待

研究内容 お手紙に同封されていたシンポジウム趣意書の要約の中で、「グローバル化」や「高度の進歩を遂げた科学技術」といったキーワードが、「21世紀の東方学」への新しいアプローチの根拠として強調されています。この項における私のコメントは、この要約の中で提起された問題に基づくものです。「非実利的な学問は、複雑化した現実社会との接点を失いはじめている」という言葉は、今日の世界でしばしば耳にするものであり、現実的要請に応える教育研究システムを求める声も上がっています。ここでいくつかの問いが問われねばなりません。学術研究と現実世界を結びつけたり、隔てたりする要因とは何なのか、誰がこの「現実世界」を規定するのか、そしてまた誰が研究の方針を定めると目される「要請」を規定するのか、です。現実世界とは往々にして政府と企業が必要とするものであり、「要請」を規定するのも、往々にして彼らであります。それゆえ、その意味においては、これはまさしく大学と学術研究とが政治的・経済的力に対峙して独立でありうるのかという問題であるのです。さらに言えば、もし「現実世界」が学術研究から遠ざかっていくのならば、政府や企業が定める方向を追う前に、大学自身が自らの役割と、自分たちが何を成し遂げようとしているのかを適切に考察することが重要なのです。たとえそれが社会における大きな趨勢となり、学術界がそれに適応せねばならない場合でも、私はそれが大部分においては学術の自己調節過程であるべきだと考えます。学生達はそのような趨勢に影響を受けるでしょうし、彼らの選択が大学の方向性を規定していくでしょう。その後、彼らが研究を続けるなら、彼らは自らの研究課題を選択していくでしょう。もし大学が社会の趨勢に素早く反応しようとし、このような大きくかつゆっくりとした動きを先取りしようとし始めれば、その結果は、その時々「政治的に公正」な、聞こえのよい謳い文句を追い求めるだけとなり、結局そうした流行の表現が、

この情報化社会に中で変移するだけに終わってしまう危険があります。

しかしながら、このようなことを考慮すべき余地のある領域も存在すると思います。趣意書の要約の中では「既存の価値観では解決し得ない」新しい問題について言及されています。現在とより密接に関わっていくためには、人文科学研究は自らの理論的基盤をより発展させ、その意味において社会科学に接近せねばならないと私は考えます。利用可能な新しい技術を用いた新しい方法論を開拓していくこともその一部でしょう。今日グローバル化された時代においてはまた、アジア文明および地域内の各国の関係というより広い視点を採用しつつ、これまで以上に境界超越的な地域研究が必要であると思われる。要するに、私は人文科学研究が新しい環境によりよく適応するためにも、理論的、方法論的再考を必要としていると考えているのです。しかしそれでも、人文科学研究が果たすべき役割は、政治や経済の側から規定される「現実世界」の要請に応えることではなく、人類の知識そのものや、独立した学術研究の価値を守り、「現実世界」の要請によって埋め込まれてしまう価値に代わり得るものを提供することであるのです。

情報公開の方法 研究プロジェクトやその成果をウェブ上で公開することはもちろん非常に重要です。同様にメーリング・リストや電子メールによるディスカッション・グループを用いることも重要です。より多くのことがネット上で可能になればなるほど、国際的共同研究はより容易になるからです。

教育システム 私は上段において、より広範な地域研究の重要性を強調しました。ですから、東方学研究所の大学院を創設する場合、教育と研究の領域は、そのいずれもが地理的な意味でも主題的な意味でも適切に構想されるべきです。というのも、これはいわゆる「エリア・スタディーズ」になるのであって、日本研究をも包摂した上で、「他の部分」をどのように確立するのが問題となるでしょうが、日本に関する膨大な領域はもちろん「エリア・スタディーズ」の範囲におさまるものではありません。これらの問題のいくつかを解決する方法の一つは、地理的な側面をあまり強調せず、より大きな理論的コンテキストのもと、社会科学からアイデアを拝借しつつ、より境界超越的な問題に焦点をあてることであります。

ロンドン大学アジア・アフリカ学部 (SOAS) 朝鮮学研究
講師 アンデルス・カールソン

牟発松 (武漢大学人文学院歴史系教授)

漢学由来重洛京

人文科学研究所と京都大学の中国学

1. 昨年の12月、筆者は幸運にも長い間のおこがれであった京都大学人文科学研究所にて研究生活を送ることができない、また幸いなことに人文研が主催する連続公開シンポジウム「21世紀の東方学」の第2回「東方学と国際協力」に間に合いました。シンポジウムの後で第1回の報告集を拝読し、今回のシンポジウムの趣旨をおおよそ知ることができ、人文研が新世紀のはじめにあたって研究体制を大胆に改革し、新しい手法を模索しようと努力し、グローバルで斬新な東方学に適用しようという新構想を持っていることに感慨を禁じ得ませんでした。たまたま、人文研ないし京大の以前の研究活動の評価、及び、今後の発展に対する希望を述べてもらいたいとの依頼がありましたので、以下の管見を述べました。専門や見識に限りがあり、加えて海外研修中のことでもあるので手元の資料が欠けており、間違いが多々あるかと思いますが、謹んでご叱正を請う次第です。

2. かつて1980年冬から1981年春にかけて、我が師、唐長孺先生が客員教授として人文科学研究所に数ヶ月滞在されましたが、帰国に際して、七言律詩をものされました。その詩にこうあります。

現説天涯若比鄰，蓬瀛飛渡覺身輕。唐風已自忘遊旅，
漢學由來重洛京。史跡千年勤禹域，靈文三洞探玄經。
流風幾輩傳薪火，合向鴻門老成。

(非常に遠い所にいるのに、まるで隣にいるように親しく思われる。かつて仙人がすむといわれた蓬萊こと日本に飛んできたので非常に体を軽く感じる。唐代に建てられた京都に、現在もなお大量の中国の伝統文化と習俗が残っており、今自分が外国にいることを忘れてしまう。洛京、すなわち京都の中国学はこれまでずっと学界に重んぜられる所であった。京都大学は禹域、すなわち中国の歴史地理の研究を重視し、謹嚴かつ精密であった。仏教や道教などの宗教に関しても優れた成果を残している。新しい薪を足して火を消さないようにする様に、京都大学の中国学研究は代々伝えられている。漢代に学校と書庫が置かれた鴻都、すなわち洛京に行き、そこにおられる声望高い先生に学問のこ

とを尋ねなければならない)

「漢学由来重洛京」とは詩文中のレトリックではありませんが、学术界における京都の中国学の評価を反映しており、いささかの誇張もございません。かつて戦前に留学したアメリカの研究者がこの様に申しております。「東洋学において京都は世界のメッカ、中心である」(京都大学人文科学研究所編、連続公開シンポジウム「21世紀の東方学」第1回「東方学のフロンティア」5頁)。

京都における近代中国学の発展は周知の通り、明治・大正の頃にさかのぼります。京都大学文学部が設立され、内藤湖南、狩野直喜を中心とする「支那学会」「支那学社」及び刊行物『支那学』が相次いで世に現れました。1929年、人文科学研究所の前身である東方文化学院京都研究所が設立され、当時の京都東方学の地位と実力を顕示すると同時に、以後の京都東方学の発展の礎が定められました。1930年11月、いまの人文研北白川分館、スペインの僧院を模倣し、また東方風を帯びたロマネスク建築、格調高く典雅で、気品漂い荘重な建物が竣工落成しました。開所セレモニーにおいて内藤湖南・梅原末治両教授が講演されましたが、論題はともに中国学についてであり、研究所が中国学を中心としていることを強く表明されましたし、研究所中央の青空を指す尖塔は京都の中国学が国際的な中国学における一つのピークとなることを象徴しているようでした。そのすぐ後、日本国内外の情勢は転がる玉のように転変しましたが、京都の中国学は風雲に晒されながらも(その間の是非曲直は論じませんが)、独特の機縁によって古典研究・考古学調査および文献収集に非常に大きな成果をあげ、国際的な中国学の重鎮としての地位を確立しました。この後、長期の平和的環境と経済発展が、人文研と京都大学の地の利、学縁(所内の日本学、西洋学、東洋学などの学際間交流)及び、歴史文化資源にプラスとしてはたらき、京都の中国学・東洋学は、加速度的発展を遂げる時期に入りました。50周年記念となる『東方学報』第52冊、70周年記念となる第72冊、それらの中で示された研究成果・研究陣営・研究分野・研究方法および国際協力とその影響は、いずれも人文研ならびに京大が名実ともに国際的な東洋学の中心であり、この学術分野では不動の地位にあることを示しています。筆者の見た「漢学由来重洛京」たる理由を挙げれば、以下の数点になるかと思われます。

第一に、研究条件に特に恵まれ、特別に完備した、信頼できる研究資料を有しています。人文学に関して言えば、今までに文献資料(伝世典籍、出土文献(出土古本・文

書・金石拓本及び考古資料など)、及び近現代の書籍、定期刊行物を含むを有しており、これらはもっとも基本的な研究資料です。中国学関係の文献について、人文研ならびに京都大学の収蔵品は日本国内屈指であるだけでなく、世界的にも、本国中国においてすら、重要かつ不動の地位にあるのです。その理由は、(1)豊富で完備した中国学文献を有するのみならず、大量の調査資料、たとえば響堂山石窟・龍門石窟の資料を有していること。特に雲崗石窟の考古調査と輝かしい数十冊の大著からなる研究報告等は、今も研究者が引用するところであり、国際的にも誉れ高いものであります。(2)研究者が充分有効に活用できる中国学文献目録・索引などの工具書・参考書などを提供していること。以下数例挙げますと、研究所所蔵の文献目録『京都大学人文科学研究所漢籍分類目録』、『京都大学人文科学研究所漢籍目録』があります。また1935年から毎年一冊刊行されている、当該年度の日本・中国・欧米の東洋学に関する研究論著を網羅した『東洋学文献類目』は、世界中の東洋学者が計り知れないほどの恩恵を受けているものであり、類似の目録で連続出版されているものを筆者は専断にして未だ見たことがありません。さらに専門的な索引としては、平岡武夫先生らが編著された『唐代研究のしおり』があり、現在の唐代史家でこの本を利用しない者はほとんどおりませんし、筆者の博士論文もこの本から大いに恩恵を受けました。(3)一つの重要文献を学術的に深く研究し、後学が関連する研究分野の最前線に足がかりを得られるようにしていること。たとえば塚本善隆氏の『魏書釈老志の研究』や、文献会読の研究班による訳注などがそれにあたります。

第二に、中国学(および東洋学)に適應した特殊な研究方法、すなわち原典を共同研究において会読するという方法を作り出したことです。数十年間、共同研究班は人文研の一番の基本にして最も特色を具えた研究方式となり、また京洛古都の名声高き学術風景となりました。共通の関心を有する課題をめぐって、課題と関連する原典もしくは出土文献を選び、所内や京大の様々な研究を行っている先生方、また日本国内の他の研究機関の先生方、世界各地からの客員あるいは訪問された学者達、もしくは博士課程にある大学院生達が、少なくとも十数人、多い場合は数十人集まって、班長の指導のもと、自由平等に意見を述べ、率直に疑問を提示し、隠れた事象を探し求めます。そこでは「徴なければ信ぜられず」、起源にさかのぼり、疑いあれば必ず追究し、知恵のぶつかり合いの中に靈感の火花は閃き、数々の専門がクロスオーバーし、様々な視点からの探索に

よって新しい啓示と思考が生まれます。そして古典文献を一字一句追いかけていながら切磋琢磨していくと、知らず知らずのうちに実証に意を注ぎ、空談を良しとしない謹厳な学風が養成されるのです。研究班で提出された問題点と疑問点は皆円満に解決されるわけではありませんが、問題点を提出することは解決することよりも往々にして意義のあることですし、これによって新しい研究の出発点と課題が生まれます。研究班が終了すると、一部あるいは数部の質量ともに高い研究報告が作成されるのが通例となっており、研究班から生まれた成果にはまことにすばらしいものが数多くあります。唐代制度史の専門家、礪波護教授の新著『京洛の学風』第6章自伝風回想の中に「八つの研究班」という一節がございますが（中央公論新社、2001年、356-358頁）、大学院生時代であった1960年の春から1994年まで、同時に八つの研究班に参加したことを回想しておられ、唐代史の名家の成長の軌跡が生き生きと示されています。

第三に、人文研及び京大に中国学の大家が集中し、継続的な、また類い希なる成功をおさめた研究活動を経て、質量ともに高い学術成果を得、大きな影響力をもつ京都学派を形成したことです。筆者がおおよそを知る六朝隋唐史について言うならば、この時代の歴史を研究する著名な研究者としては、宮崎市定・藤枝晃・平岡武夫・宮川尚志・川勝義雄・谷川道雄・吉川忠夫・礪波護・愛宕元の諸先生がおられます。また六朝隋唐中世説・唐宋変革説を唱え京都歴史学派を創設した内藤湖南先生は言うに及ばず、さらに六朝隋唐に限定せず中世の各分野の研究者を挙げれば、宗教史に大きな貢献を果たした塚本善隆、科学史では藪内清、農業史では天野元之助、石窟考古及び出土文物に関しては水野清一、長廣敏雄、日比野丈夫、礼制史には小南一郎といった各先生がおられます。彼らの名前は彼らの研究論著とともに、六朝隋唐研究史上不朽の地位にあるといえます。これらの研究成果は、いずれも原典・考古文献から始まっており、堅実で信頼できる史料に立脚しています。また先学の成果を十分に利用し、後学のためにその不備不足を補うものであり、また新たな資料を用い、あるいは新しい理論と視点から、その結論を発展せしめ、時には批判に及ぶこともあります。先学の研究の存在をゆるがせにすることなく、先学の研究成果を出発点としています。筆者が言う京都学派は主に京都の中国学で、特に内藤湖南の時代区分説を代表とする京都歴史学派です。ご存じの通り、この学派は国際学会において非常に大きな影響力を有して

います^③。しかし、京都歴史学派の内涵はただ時代区分論に留まるのではなく、そこには研究特色すなわち研究方法の特徴も含まれるべきです。それは原典を重視し、文献の考訂を重視し、実地の考察を重視し、中国の伝統的な学術、特に清代考証学の修養と基本的な知識と技術を強調することであり^④、桑原隲藏・狩野直喜・内藤湖南以来の伝統です。京都の中国学が産み出した非常に優れた業績は、この研究方法の伝統が有効であったことを証明するに充分です。京都の中国学が方法の上では帰納を重視し演繹を慎んだことは、乾嘉の学者の研究方法与非常によく似ています^⑤。このように京都の中国学が特に実証考察を重んじたことを否定することはできません。もしそうでなかったとしたら、内藤湖南に始まり、宮崎市定の集大成を経て、川勝義雄・谷川道雄が継いで発展させ、吉川忠夫・礪波護が特定の領域に実証を加えた六朝隋唐中世説が、どうして成立発展し得たでしょうか。

第四に、人文研が世界各地の中国学研究者を引き寄せ、彼らと京大や人文研が育成した学生（分かりやすい例として六朝史家の岡崎文夫氏）を通じて、京都の中国学の研究成果と方法が四方に輻射され^⑥、その影響が拡大したことです。六朝隋唐史を例といたしましょう。中国近代における六朝隋唐史研究の基礎を定めたのは陳寅恪です。彼の研究方法が内藤湖南から直接の影響を受けたものなのかどうかについては、なお確認が必要なのですが、ただ陳寅恪が最も尊崇している王国維と羅振玉が、京都学派の学者と密接な交際と学術交流を持ったのはみなさんご存じの通りです。先に我が師唐長孺先生が京大を訪問されたときにものされた七言律詩をあげましたが、その中の「合向鴻都問老成」という句にある「老成」とは、すなわち宮崎市定先生のことなのです。唐先生のその時の訪問時間は長くはなかったのですが、六朝隋唐史研究の日中学术交流に関して非常に大きな意義があり、礪波護先生もこれが「南北朝隋唐史の分野における初めての真の学術交流」（前掲『京洛の学風』360頁）であったとしておられます。唐先生もまた『東方学報』第54冊において『新出吐魯番出土文書発掘整理経過及文書簡介』を発表され、整理出版作業がまだ終わっていなかった新出土の文書を紹介されました。唐先生の名作『魏晉南北朝史論叢』が50年代中期に出版されてから程なく、日本の学界から強烈な反響があり、評価も非常に高く、宮崎市定・川勝義雄・谷川道雄等の日本の同学の著述の中にも多く引用されております。ただ唐先生などの中国の研究者は、日本の同学の研究に関しては余り多くを知

りませんでした。人文研訪問後、唐先生が会長の任を継続された中国唐史学会や、副会長を担当された敦煌吐魯番文書研究会が、日本の同学との間で双方向かつ頻繁なる学术交流を進め、「現説天涯若比鄰」という状況が現実のものとなりました。唐先生は自分の研究と教育において、日本の同学の研究成果を利用することに非常に意を用いられ（彼は宮崎市定教授の全集など、日本の同学が寄贈した大量の論著を所有していました）、論著の中にいつも引用しておられました。1987年に、谷川道雄・吉川忠夫らの先生方から成る一団が武漢大学を訪問され、『地域社会の六朝政治文化上における作用』をテーマに「日中国際共同研究」を行い、その論文集（谷川道雄編、玄文社、1989年）には唐先生など多くの中国学者の論文が収録されています。唐先生の『魏晋南北朝隋唐史三論』（武漢大学出版社、1989年）の中で、唐先生はこの時代の性質に関するご自身の見方を系統的に論じておられますが、その結論は京都歴史学派の観点と非常に相通ずるところがあります。唐先生の基本的な考え方が形成されたのは非常に早く、基礎となる研究成果は50年代に発表されはじめており、拠るところの理論や観点も全く同じというわけではありませんが、唐先生が『三論』をものしておられたとき、宮崎市定・川勝義雄・谷川道雄など日本の同学の研究成果を参考しておられたので、唐先生の立論に影響があったに違いありません。

3. 20世紀の京都中国学という舞台の上で活躍した大家が相次いで退官されたとはいえ、実力雄厚にして業績他に勝る次世代の研究者が、既に頭角を現しています。「流風幾代伝薪火」、21世紀幕開けの時に、人文研及び京大の中国学の研究スタッフは、人々に面目一新の感を抱かせました。2000年4月、人文科学研究所は時代の要求に応え、研究の発展を促進するために全面改組にむけての組織を編成しました。2001年10月からは、先に述べました連続公開シンポジウムが始まりました。人文研の静謐にして濃密な学術の雰囲気は過去のものとなったかのようにですが、同時に改革の熱い波が真っ向から向かって来るという気概を抱かせました。

まさしくシンポジウムにおいて指摘されたことは、東方学は時代の変化が起こした問題に直面し挑戦しなければならないということです。つまり高度に発達した科学技術、特に情報革命がもたらした経済・政治・社会・文化のグローバルな風潮、グローバル化傾向がもたらした研究対象

東方世界とりわけ中国の大きな変化、高度に発達した科学技術とそれに伴う生態環境・倫理などの新時代の問題です。東方学はこれらを解釈・解決する助けとなるにふさわしい研究成果を提出する必要があるのですが、これらの仕事は伝統的な東方学では担いがたく、それゆえ新しい東方学を構築することが必要です。そこでそれにふさわしい新しい機構と体制、新しい研究方法と手段、新しい理論と価値観、新しい学术交流の形式とメディアなども含め、シンポジウムの講演者はそれぞれ違う角度から彼らの視点と試みを紹介されました。

シンポジウムに参加した研究者が指摘した、人文研・京大及び日本の東方学が面している問題はまことに正しく、人文研がこの問題に対して採用した、あるいは採用しようとしている措置は的確です。過去2回のシンポジウムで発表された講演者の見解は極めて建設的であり示唆的です。人文研は1949年に三つの研究所が合併してできたものですが、人文研となって以後50年間の速やかなる発展によって、現在の組織と体制の基礎が定まったのです。人文研が今現在進めている組織改編と、今まさに進行している東方学シンポジウムは、人文研の今後を更に発展させ、それにふさわしい組織・体制及び理念基盤を提供してくれるであろうと確信しています。人文研・京大及び日本の東方学が今直面している問題は、また人文学全てが直面している事柄でもあるのですが、人文研と京大はこのことを自覚して問題を認識し、非常に大きな決意のもと、問題解決に着手しているように思われますが、しかしこの様な機関は少数派であり、評価されにくい面があると思われるので、筆者も浅見を述べてみたいと存じます。

我々が生活する現代人類社会は、科学技術の発展に伴い、経済・軍事・政治諸方面においてグローバル化が進んでいることは明らかです。しかしその一方でナショナリズムが次第に強くなってきており、民族・地域・宗教・言語などを通じたその影響は、文明の違いに根ざすものといわれはしますが、日増しに先鋭化し、深刻な問題となっています。現在世界におけるテーマは平和と発展ですが、一方ではそうした風潮に異議を唱える地域もあり、民族衝突が時ならずして生じていることはご承知の通りです。こういった衝突の最も深い原因は経済利益とパワー・バランスなのですが、ハンチントンが言う「文明の衝突」、文化の共通性と差違性とが国家間の対立と連合に影響するのであり、異なる文明集団や国家間に起こる衝突は大規模な地域戦争に発展する可能性があるといったことも全く根拠のないこ

とはありません。グローバル化を意識することとナショナリズムを意識することは、まるで矛盾するかのようですが、我々は確かにこの矛盾した世界に住んでいるのです。しかし、日ごとに明らかとなるグローバル化の意識と、ナショナリズムや文化伝統への強い意識がいつも必ず矛盾するわけではありません。共存も可能なのです。簡単に喩えるならば、京都は日本で最も伝統的な文化古都と言われますが、そのため世界各地から観光旅行者・留学生・研究者が大量にやってきます。そしてこのことは、京都が国際性を備えた文化古都であることをも示しています。京都の国際性とは、まさしく京都の有する東洋的性格と日本の性格、京都中国学の伝統をも内に秘める東洋文化、極めて日本的な特色を備えた庭園・寺院・神社などから生じたものなのです。この意味では、グローバル化を単一の世界文明に同化する過程と単純に捉えることはできませんし、まして世界全体が西洋文明と同化することであると到底考えられません。われわれはこれからも東洋文明の伝統と根源、それらと現代文明との関わり、またそれらが現代文明の中にもどの様に現れ作用しているかについて、深く系統立てて研究し続けなければなりません。これによって、先に述べた矛盾に満ちた世界歴史の潮流の中で、東方学は独自の歴史的使命を負うことができるのです。

人文研の連続シンポジウムの第1回会議において、イタリア国立東方学研究所長シルヴィオ・ヴィータ教授は「欧米における近年の東洋学の動向」と題した講演の中で、「東洋学」は不幸な言葉だと述べておられます（京都大学人文科学研究所編：連続公開シンポジウム『21世紀の東方学』第1回『東方学のフロンティア』12頁）。まさしくヴィータ教授の仰る通り、欧米の「東洋学」は、エドワード・サイードの『オリエンタリズム』が出版されて以後「悪名高」くなってしまいました。サイード氏は、西洋人の言う「オリエンタル・スタディーズ」の命名と定義は、西洋人が植民地を開拓していく中で生まれたものであり、植民地の利益をあげて発展してきた学術権力語だといえます。私も氏の意見はある程度正しいと思います。西洋における中国学の発展は、いわゆるエジプト学やアラビア学などの東洋学の発展と同じではありませんが（たとえばヨーロッパの啓蒙時代には中国の伝統的政治倫理及び重農思想が特に重視されていました）、基本的発展の軌跡は、西洋が中国において植民略奪した歴史にほぼ符合します。ただ、中国学は学術となり、また学術自身の規律によって左右されるようになり、純然たる学術的研究成果を生むようにな

りました。また、歴史の進歩に伴い、西洋の中国学の内にあった植民文化的色彩と西洋中心主義的なイデオロギーなどは次第に消え失せ、純然たる学術内容が次第に興起してきました。真理の追究を指向する純粋に学問的な研究とその成果はイデオロギーを超越するものであり、欧米の中国学界においては、西洋中心論的なエゴを克服した中国研究とその成果が日増しに増加しており、枚挙にいとまありません。これにより、われわれは西洋で最初に成立した東洋学と、それ以後に発展して純粋な学問領域となった東洋学及びその成果とを厳密に区別しなくてはなりません。

近代的な京都の中国学が成立する以前、中国学のかわりであった学問は江戸漢学と明治以来の東京大学の東洋学でした。前者は宋明理学を尊崇し、「実際には中国の学問を借用して日本独自の学問体系を樹立したが、自我を中心とする完全に日本化された漢学」でありましたし、後者はヨーロッパ近代学術をよりどころにして立ち上げた学問体系で、その体系の中において「中国は江戸漢学の利用対象から学術研究の「客体」「異文化」となりはしたが、この「客体」は多かれ少なかれ西洋文化崇拝者の蔑視と批判の対象となった^⑧」。これに対して京都の中国学の創設者は、中国文化を理解する態度を持ち続けました。彼らは中国学それ自体の特徴を強調しましたし、中国の学術自身の特色を強調した者もありました。中国の歴史発展の独立性と主体性を認め、中国文化の発展に内在した論理に依拠して中国を認識・理解・研究し、それにより京都中国学の中国歴史体系論が明確に看取できるようになったのです。それに見合う研究特色は先に詳しく述べましたが、京都大学副学長の尾池和夫教授が連続公開シンポジウム第1回の「開会挨拶」で述べられた言葉を用いるならば、「（人文研の80年に近い歴史の中）中国古典学の分野で、数多くの世界的な業績を上げてこられました。これは、中国の優れた文化に対する敬意をモチーフとしながら、しかも厳格な文献実証主義の方法論に支えられた学問研究の積み重ねであったと言えると思います。」（京都大学人文科学研究所編：連続公開シンポジウム『21世紀の東方学』第1回『東方学のフロンティア』9頁）。筆者は副学長先生の総括に非常に同意しますし、人文研と京大中国学の歴史も十分にこの結論を証明しています。私は京都の中国学の伝統、研究趣旨と指向及び人文研と京大が具える特徴ある研究方法と研究成果が、大いに進行しつつある国際化と強烈なナショナリズムが併存する現代社会にとって、独自の価値を有すると固く信じております。例えば、中国伝統文化と周辺民族や外域

文化の交流は、イスラム教文化とキリスト教文化の交流と相対して顕著な特色があり、これは京都の中国学による大量の実証的成果の中に、信頼するに足る客観的な証拠があります。これらの特色が現在中国の対外交流の中に体现されているか、また体现されているとしてどの様なかたちであらわれているか。もし中国伝統文化の歴史上の進展に関する客観的で実証的な研究がなかったならば、われわれにはこの問題に答えるすべがありません。また、たとえば内藤湖南氏は早くも20世紀初葉において文化と芸術の重要性を非常に強調しました。そしてそこから生態環境を保護する論を提示し、人類の文明生活における最高の環境は自然に対する休まない征服ではなく、自然を美化し保護し、自然の生活と同化することを最終目的とすべきだと認識しておられます^⑨。この論も学術研究の結論から自ずと導き出されたものです。京都の中国学を内包する人文学は、世界歴史の潮流に順応する上で、独自の手段と効果があるはずだと思います。たとえば日本の歴史教科書が引き起こした日本と中国・韓国・朝鮮との摩擦は、双方の歴史文化が明瞭に理解されていないところに問題があると思いますし、この問題を解決するためには、双方の歴史文化を理解することから始めなくてはなりません^⑩。

典雅荘重な人文研北白川分館に足を踏み入れるとき、筆者は複雑な気持ちを抱くことがあります。この美しい建物がどの様な費用によって建てられたのかを思い起こすことがあるのです。事実、私が仕事をしている武漢大学にもたいそう美しい建物（旧図書館・旧寄宿舍・工学楼など、いまは全国重点文物となっています）がありますが、これらも同じ様な性格の費用を用いて、ほぼ同時（1930年）に建てられたものです。武漢大学には名物の桜並木があります。この美しい桜の花と残酷な戦争とを関連づけるのは難しいでしょうが、遺憾ながらそれは事実です。数十年来北白川の人文研に集まってきた幾世代もの日本の研究者は「中国の優れた文化に対する敬意をモチーフとしながら」「厳密な実証的な方法」で、中国の伝統文化に関連する優れた研究成果を得、日本及び世界の人々の、中国文化や今日の中国に対する理解をたすけ、また中国・日本の文化交流を増進しました。毎年3月の末、桜の花が満開になる頃、武漢大学の桜並木は遊覧客であふれかえります。日中国交回復後は、園内に新しい桜の木が植えられ、遊覧客は美しい桜の下を通るたびに日本文化の美しさを知り、戦争の陰が薄らぎます。文化交流は往々にして政治と軍事の壁を乗り越え、異なる民族、異なる国家間の理解を増すものです。文

明の衝突も異文明の交流と理解があれば根本から解決します。新しい東方学はこの方面に一層大きな貢献を果たすでしょう。

『東方学報』第52冊 京都大学人文科学研究所創立50周年記念論集（1980年）の中の、当時の所長河野健二教授による「序文」によれば、1930年代後半に日中戦争が本格化すると、日中両国の研究者間の信頼関係は損なわれ、学术交流の道は閉ざされましたが、その後の経緯について、「1978年から「比較文化」を主題とする客員研究部門が新部門として設けられた。加うるに、東洋学文献センターの設置によって、研究所を訪れる国内および外国の研究者数は飛躍的に増大した。数おおくの外国人来訪者のうち、客員教授や招へい教授、外国人研修員として、共同研究に参加する人々も現れてきた。人文科学研究所は国内のみならず海外においても、高い評価をあたえられており、研究所の意図のいかんにかかわらず、国内的、国際的な研究センターとして位置づけられている現状にある。研究所の内と外との関係や連携をどう設計してゆくか、これがわれわれの当面する重要課題であるといえる」と記されています。これぞまさしく現在進行中の連続シンポジウムの重要課題であります。特に日中の学术交流に関して言えば、この20年間で飛躍的に発展はしましたが、しかし筆者はもっと実質的な交流と協力があってもよかったと思っています。例えば六朝隋唐史においては、学术交流は日ごとに繁くなり、重要な論著の翻訳と研究動向の紹介が増えておりますが、六朝隋唐時代の性質の把握という重要な問題に関しては、日中双方のより深い理解と有効な対話に乏しく、研究上のやりとりはもっと少ないのです。このほかいろいろなことが原因となり、一般の中国人研究者にとっては、人文研と京大の研究者の数多くの優秀な成果も含めて、関連する日本の研究者の研究成果を目にすることは難しいのです。近い将来、現代のメディアによってこの問題が解決することを望んでいます。例えば『東洋学文献類目』はすでにウェブ上で公開されており、これは非常によい試みですが、残念なことに孤陋寡聞な筆者は、今回人文研を訪れてはじめてこのうれしい話を知りました。最後になりますが、人文研に大量に訪れる研究者がもつ学术交流中の特殊な役割をどの様に発揮するか、また来訪者にとって更に便利な研究条件をどの様にして整えるか、これらも考慮するに値する問題だと思います。

4. かつて1981年に我が師、故唐長孺先生が人文研を訪れた際、受け入れ教官は故川勝義雄先生でした。20年後の2001年に、筆者は幸いにも人文研に留学していますが、受け入れ教官は20年前は助手であった富谷至教授です。筆者は博士課程修了後唐先生の助手となり、彼が『魏晋南北朝隋唐史三論』を執筆するのに協力しました。この偶然に、何か不思議な縁でもあるのではないかと驚かざるを得ないのですが、もし本当にそういった縁があるのなら、ひょっとすると京都の中国学の根幹である人文研と京大の学術が世界の中心となるかもしれません。浅陋を顧みず議論してまいりましたが、いわゆる野人献芹でございました。この機会をお借りして、人文研と京大の東方学が21世紀の国際学会において長くその中心にあり続けますようお祈りいたします。

牟発松

- ① 拙著『唐代長江中游の経済与社会』（武汉大学出版社、1989年）312頁参照。本書は中国のたいていの大学図書館では見つけにくいのですが、人文研には収蔵されております。その他の重要な中国学研究論著に関しては言う必要はないでしょう。
- ② 「京都学派」には広い意味があり、西田幾多郎氏を代表とする哲学や、河上肇氏など経済学の体系も含みますし、京都の中国学もまた中国学中の經学・文学などを含みます。ここでは主に京都の中国学の歴史学派を指しています。また、漢学・支那学・中国学・東洋学・東方学などの術語は、名前が違っただけではなく、内容に大きな差があり、それぞれに具体的な歴史と学術内容があるのですが、ここで詳しく説明することはできません。今は旧例に従っておきます。
- ③ 関連する論文が非常に多いので、新たに出版された内藤湖南研究会編『内藤湖南の世界 アジア再生の思想』、河合出版、2001年を参照してください。それ以外に、筆者が最近書きました「略論内藤湖南和陳寅恪的“六朝隋唐論”」（2001年12月2日に龍谷大学で行われた『魏晋南北朝隋唐の歴史特質』日中学術シンポジウムの席で発表し、出版待ち）も参考になると思います。
- ④ 周一良教授が故川勝義雄教授の『六朝貴族制社会の研究』を書評されたとき（周氏「評介三部魏晋南北朝史著作」、『北京大学学報』1985年第2期）、特に「作者は資料を熟知し、資料の理解と選択がきわめて的確で、非常に深い漢文の修養があることがわかる」と指摘しています。
- ⑤ 京都大学人文科学研究所編：連続公開シンポジウム『21世紀の東方学』第1回「東方学のフロンティア」趣旨説明に、京大東洋学の伝統の特徴として「思弁を排し、実証的な方法で研究する」とあります。梁啓超『清代學術概論』が総括するところの清学の研究方法の伝統に、凡そ一義を立てれば必ず証拠を挙げ、同類の事項を並べ比較して研究し公則（帰納）を得ることを最も喜び、もっぱら一つのことを深く研究するのを喜び云々とあります。

- ⑥ 筆者は井波陵一教授・富谷至教授が班長を務める「三国時代の出土文字資料」研究班に客員として参加していますが、年明け前にこの研究班に参加しておられた西北大学の黄留珠教授が手紙をよこされ、研究班にて原典を会読するという共同研究方式を自分の研究機関にも適用したところ、すこぶる効果があったと言っておられます。
- ⑦ 前掲拙稿「略論内藤湖南和陳寅恪的“六朝隋唐論”」の注45を参照。
- ⑧ 錢婉約「日本中国学京都学派芻議」、『北京大学学報』（哲学社会科学版）2000年第5期。
- ⑨ 内藤湖南「民族の文化と文明とに就て」、『内藤湖南全集』第8巻、筑摩書房、1969年。
- ⑩ 谷川道雄教授は「中国社会の共同性について」において、この問題に関する自己の見方を学術層から提示しておられ、参考に値すると思います。『東洋史苑』第58号、2001年10月。

後 記

この報告書は、ご覧のとおり二つの部分から成っている。前の部分は、2001年10月13日、12月15日、そして2002年3月16日の三回にわたって開催された連続公開シンポジウム「21世紀の東方学」の記録であり、後の部分は、世界各国の著名な東方学研究者に依頼したレビューの日本語訳である。いずれも、2001年度京都大学教育改善推進費（学長裁量経費）の援助を得て実現した企画である。

三回のシンポジウムとレビューの内容はきわめて多彩で、多岐にわたるものであるが、その底に通奏低音のように流れているのは、京都大学あるいは人文科学研究所の東洋学が、20世紀の人文科学の世界に残した輝かしい足跡に対する敬意とともに、21世紀においてさらに大きな足跡を刻んでいくためには、次の時代の要請に応える新しい学問分野への展開が求められているとの共通認識である。これらの認識に基づいて、人文科学研究所では21世紀に相応しい学問分野への展開をめぐる鋭意検討を進めているが、現在までのところ、(1)漢字文化と情報科学の融合をはかる漢字情報学、(2)文献研究と実地調査の結合をめざすフィールド中国学、(3)歴史的なパースペクティブから現代中国社会の深層を探る現代中国学、(4)従来の哲史文の枠組みを超えて中国文明の総体を考究する総合中国学など、いくつかの新領域が構想されている。わたくしどもは、このような21世紀の新しい東方学の研究・教育体制の構築をめざして、京都大学の関係部局、さらには国内外の関係機関とも緊密に協力しながら、その方途を模索していく所存である。

最後に、シンポジウムにご臨席いただき、ご挨拶と提言を賜った長尾真総長、尾池和夫副学長、学問的に意義深い講演と討論をいただいた総計24名のパネリストとコメントーターの先生方、そしてその長時間にわたる討論に熱心に加わっていただいた延べ400名を越す参加者の皆様、さらには暖かいエールと的確なレビューを賜った23名の海外の東方学研究者に、衷心よりお礼申し上げます。またシンポジウムとレビューの企画、準備、実行に優れたチームワークで当られた人文科学研究所の研究者と事務官各位に対しても、深甚の謝意を表したい。

2002年3月31日

東方学研究部主任 森 時彦

廿一世紀の東方学

2002年3月25日 印刷

2002年3月31日 発行

発行所 京都大学人文科学研究所
京都市左京区吉田牛ノ宮町
〒606-8501 TEL 075-753-6902

印刷所 共同印刷工業株式会社
京都市右京区西院久田町78番地